［文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業］

# 新たな文化芸術の創造を支える活動支援および人材育成のためのプラットフォーム形成研究

H 30（2018）年度　研究報告

文化庁
女子美術大学

# 目　次

P.03｜はじめに：研究趣旨と調査計画・方法について

1. 趣旨・研究目的
2. 問題意識
3. H30 年度における重点調査・研究方法

P.07｜ケース・スタディ ① AIR を活用した地域創生の視点から

京都：Re-Search

東山アーティスツ・プレイスメント・サービス（HAPS）

P.15｜ケース・スタディ ② AIR と美術大学の連携による若手人材育成の取り組み

Y-AIR｜AIR for Young

P.25｜ケース・スタディ ③ AIR と地域再生、AIR 従事者の働き方の視点から

1. 黄金町エリアマネジメントセンター
2. PARADISE AIR
3. UBE ビエンナーレ アーテイスト・イン・レジデンスプログラム

P.37｜AIR 研究会、フォーラム報告

1. 2018 アーティスト・イン・レジデンス 研究会＆トークショー
   ― 「アーティスト・イン・レジデンスを考えてみませんか。」
2. 黄金町バザール 2018 インターン・イン・レジデンス成果報告会
3. 黄金町アーティスト・イン・レジデンスの事例：これまでとこれから
4. 研修報告会〈オランダ・チェコ編〉
   ―オランダのアーティストのスタジオ獲得方法と西ボヘミア大学のアートキャンプの実践―
5. AIR シンポジウム＆研究会

P.51｜アーティスト・イン・レジデンスに関するアンケート調査

P.67｜調査からみえてくること：研究員による座談会

P.71｜あとがき：今後の調査研究に向けて

P.73｜参考資料、他

# はじめに：研究趣旨と調査計画・方法について

1. 趣旨・研究目的
2. 問題意識
3. H30 年度における重点調査・研究方法

## １． 趣旨・研究目的

文化庁と女子美術大学（芸術学部アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域研究室）では、「文化庁と大学・研究機関等の共同研究事業」の一環として、「新たな文化芸術の創造を支える活動支援および人材育成のためのプラットフォーム形成研究」と題した研究を、H29(2017)年度より3カ年の継続研究を目指して実施している。

本研究は、我が国における新たな文化芸術の創造に向けて、その「担い手」である人材に望まれる姿、役割の検証、再定義をすることにより、多様な文化芸術活動への支援、人材育成のためのプラットフォーム形成、仕組みづくりに向けた文化政策の在り方を考察するものである。特に、文化芸術による地域創生への取り組みとして全国で盛んに実施されている国際芸術祭（トリエンナーレ、ビエンナーレなど）、アーティスト・イン・レジデンス（以下、「AIR」）など、多様な活動が展開する中で、アーティスト、キュレーター、アート・マネジャー、プロデューサーなどについても多様な人材が求められている。文化政策研究者、有識者および実務に関わる人々との議論の場を設け、活動や人材等にかかる課題の抽出と共有、課題解決のための手法や事例（評価、社会的インパクトなど）を検証し、今後のより良い文化政策形成につながる共同研究を目指している。

本書はこれまでの研究成果を中間報告としてとりまとめ、関心を持つ方々と共有するものである。今後の継続研究に対し、さまざまな意見・要望をいただければ幸いである。

## ２． 問題意識

### (1) 新たな文化芸術創造の場づくりに向けて：地域文化発信のプラットフォーム形成

H29 年 6 月に改正された＜文化芸術基本法＞では、「文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造につなげていく」ことを重要視すると示された。この文脈から、国際芸術祭や AIR におけるアーティストのリサーチ、表現活動は、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業、食文化に至るまでの多様な分野と結びつくことを可能にし、新たな創造による地域文化発信のプラットフォームと多様な試みの実験の場として、国内外への積極的かつ戦略的・効果的な発信へとつながることが期待される。

### (2) 新たな文化芸術創造活動の場を支える人材育成の仕組みづくり

新たな文化芸術の創造には、作り手であるアーティストのみならず、その場を支え、運営に携わるキュレーター、アート・マネジャー、プロデューサーにも、新しく多様なスキルが求められる。国際事業に対応できる語学力はもとより、地域文化のリサーチにかかる幅広いネットワークやコミュニケーション能力、また、行政や各組織の政策、ミッションを事業につなげ、文化事業としての質を確保し、また、その成果を運営者、地域、アーティストへ等しく還元できる専門性と柔軟性が求められる。このようなスキルは従来の博物館・美術館・ホール運営における専門員とは異なるものであり、場合によってはより高度な能力が求められる。そのため、国際性・地域性の双方の視点から、新しい文化芸術活動のニーズに応じることのできる人材像の検証、再定義し、人材育成のための場づくり、経験値の共有、また教育機関とも連携した取り組みが必要と考えられる。

### (3) 持続可能な文化芸術創造活動のためのマネジメント、ネットワーキング、評価

我が国における新たな文化芸術活動の萌芽を支え、円滑な運営、発展に向けたマネジメントの課題、情報やスキルの共有のためのネットワークの構築が必要と考えられる。特に、国際的な事業を発展させていくための海外の機関・団体との相互交流やキャパシティ・ビルディング等の人材が求められているが、育成のための環境づくり、手法は確立されていない状況である。また、現在、多くの日本の文化事業は、文化庁や自治体等の公的機関から財政的に支援を受けている場合が多く、持続可能な活動へ繋げるための評価は避けて通れない課題である。特に AIR における評価手法は確立されておらず、そのあり方についての研究調査、検証の必要があると考えられる。

## ３． H30 年度における重点調査・ 研究方法

新たな文化芸術の創造の場の創出のためには、表現者であるアーティストのみならず、コーディネーター、アートマネージャー等の「担い手」は必要不可欠であり、またその担い手自身にも新たなスキルが求められる。今年度は、「地域創造」、「若手支援」、「ネットワーク形成」に主眼を置く 3 つのプロジェクト（AIR）に加え、現在注目されるいくつかの事業者へのインタビュー、現地調査を行うとともに、AIR ネットワーク研究会の協力により実施された研究会の取材により、求められる人材・スキル、プロジェクトの現場を通じた人材育成の仕組み、成果目標について調査・研究を行った。

【H30 年度調査のフロー（＊H30 年 6 月事業計画時点）】

新たな文化芸術の創造を支える 活動支援および人材育成のためのプラットフォーム形成研究

## 地域創生を目指した新たな文化芸術の創造の場

（例：芸術祭、アートプロジェクト、アーティスト・イン・レジデンス、等）

**あり方、求められる成果とは？**

### 作り手（アーティスト）に対する成果の例

- 新たな創造的活動、新しい表現の実現
- キャリア形成
- 持続可能な表現の場の提供
- 多様な交流、評価

### 地域（市民）に対する成果の例

- 地域活性化
- アートツーリズム等の新たな産業振興
- 地域資源の活用、再評価
- シビックプライドの形成

**「作り手」と「地域」**
**双方に働きかけ、つなぐ「担い手」**
**新しい人材の必要性**

マネージャー、コーディネーター、etc

新たな文化芸術の創造を支える 活動支援および人材育成のためのプラットフォーム形成研究

## H30年度の重点調査・研究方法 ①

（3つのモデルケースからのケーススタディ）

### 京都Re-search

- 担い手が地域に移住
- 地域リサーチをベースとしたプロジェクトの立ち上げ、運営
- 地域ネットワークのつなぎ手

### HAPS
Higashiyama Artists Placement Service

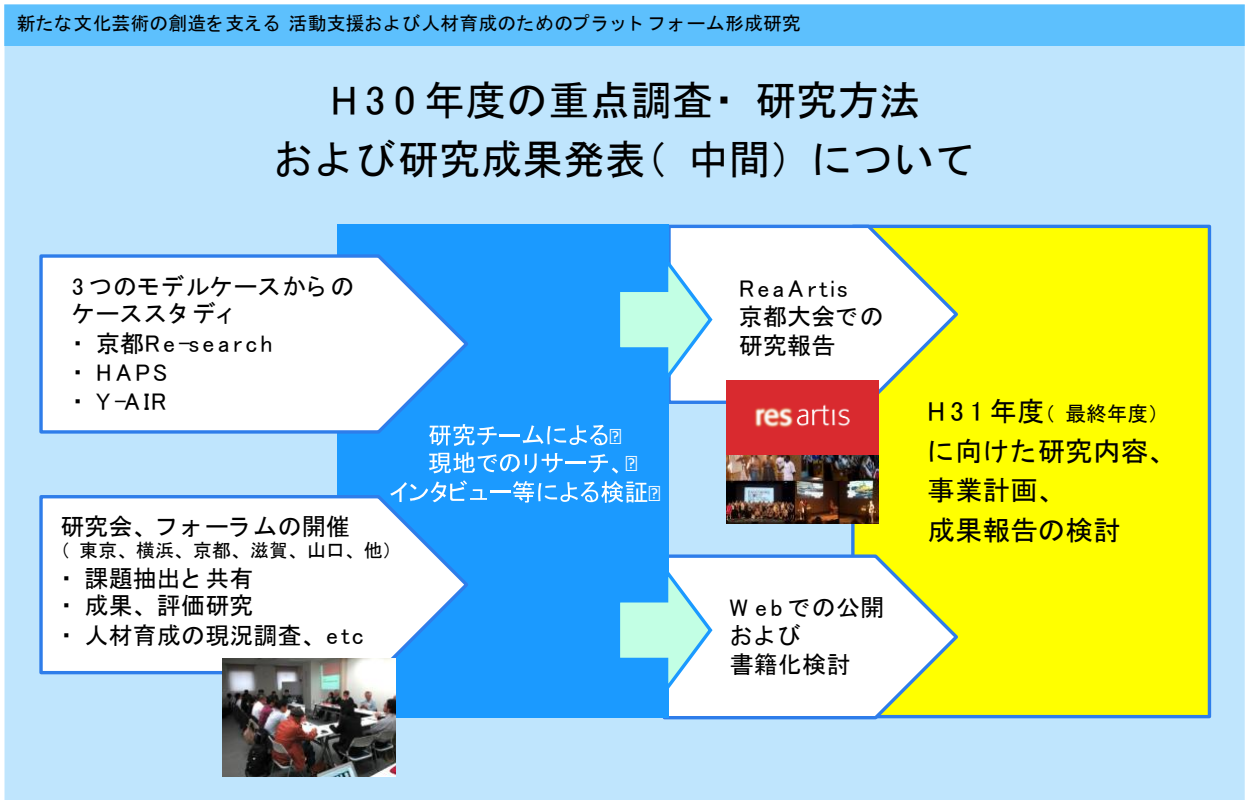
- アーティストの定住を支援
- 地域資源とのマッチング
- 若手、同時代を担うアーティスト、マネージャーたちの育成

### Y-AIR
Artist in Residence for Young

- 若手アーティスト、マネージャー、美大生のアーティスト･イン･レジデンス、インターンシップ体験支援
- 国際性の涵養

**事業成果、現場での担い手の働き方の調査、求められる人材像の抽出、検証**

**新たな人材育成に必要な文化政策（仕組み、支援方法、等）を探る**




## （1）ケーススタディ

① 京都:Re-Search（京都府）

交流人口の拡大、地域の活性化へ繋げる取組として、広域振興局単位でのアートマネージャーを順次配置し、アーティスト・イン・レジデンス事業「京都:Re-Search」等を実施。地域が本来持ち得ているポテンシャルやその魅力をアートの視点から引き出すことを試みている。アートを教えるのではなく、アートへの参加を通じて、アートで育てるという取り組みにより、地域の課題や魅力をあぶり出し、地域の新しい対話をうながす。各地域に眠る“タカラ”を掘り起こし、アートという“チカラ”を介して、地域の文化資源を生かした文化プログラムの実施で地域創生につなげることを目指す事業。

② 東山アーティスツ・プレイスメント・サービス|HAPS（京都市）

京都市の「京都文化芸術都市創生条例」に基づいた「京都文化芸術都市創生計画」における「若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり」事業として「東山 アーティスツ・プレイスメント・サービス実行委員会」を設立。芸術家支援、地域創造、国内外の芸術機関と多様なネットワーク形成、新たな芸術のあり方と、新たな社会のあり方を共に探求するイノベーション活動を主なミッションとして活動を展開している。

③ Y-AIR（遊工房アートスペースおよび国内外の芸術・美術大学の連携事業）

AIR と美術大学が連携し、将来、アーティスト、アートマネージャー等のプロフェッショナルとして活動を標榜する美術大学生に対し、海外での滞在制作（AIR）および職業研修体験の場を提供するプログラム。個々の AIR と美術大学間の共同による実践を通し、AIR というプラットフォームが美術大学教育の中に必要な存在となることに繋げ、かつ、国際間の交換プログラムへの拡大、継続性ある仕組みの構築も目指すもの。

## （2）各地の AIR 団体、AIR ネットワークジャパンとの連携による AIR 研究会、AIR フォーラムにおける情報共有、現状調査、アンケート調査、検証の実施

国内の代表的な AIR 団体・組織との連携により、各テーマにあわせた研究会（課題共有、評価研究など）を移動式で行い、その内容を記録した。また、文化庁へ担当職員の派遣を依頼し、現状認識、課題の共有と意見交換を行い、それらの情報を分析、検証を行った。

## ケーススタディ ① AIR を活用した地域創生の視点から

京都：Re-Search

東山アーティスツ・プレイスメント・サービス（HAPS）

［取材・文責：作田知樹］

**京都：Re-Search**
**東山アーティスツ・プレイスメント・サービス（HAPS）**

## Ⅰ．調査実施概要

### 京都：Re-Search（京都府）

京都:Re-Search 実行委員会
〒602-8570　京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町京都府文化スポーツ部文化芸術課内
http://kyoto-research.com/

### ［事業概要］

2016 年より、交流人口の拡大、地域の活性化へ繋げる取組として、広域振興局単位でアートマネージャーを順次配置し、アーティスト・ イン・レジデンス事業「京都:Re-Search」、AIR でのリサーチをもとにした制作展示「大京都」等を実施。地域が本来持ち得ているホポテンシャルやその魅力をアートの視点から引き出すことを試みている。アートを教えるのではなく、アートへの参加を通じて、アートで育てるという取り組みにより、地域の課題や魅力をあぶり出し、地域の新しい対話をうながす。各地域に眠る“タカラ”を掘り起こし、アートという“チカラ”を介して、地域の文化資源を生かした文化プログラムの実施で地域創生につなげることを目指す事業。舞鶴（2016 年～）、京田辺（2017 年～）、福知山（2017 年～）、京丹後（2018 年～）、亀岡（2018 年～）での開催実績がある。

### 京都：Re-Search（短期AIR事業）

京都府内のみならず、ほかの地域で活動する若手のアーティストや工芸家、デザイナー、建築家など、クリエイティブな分野で活動している人がある地域に滞在しながら、各自が設定したテーマに沿って、地域の風土や歴史等の調査を行い、そこでの発見を活かした作品プラン等の構想を立て、次年度にそのプランの実現を目指す。同時に、活動全てを記録、データ化していき、アートの視点による地域の新しいドキュメントを作成する。

## 大京都（中期AIR事業）

前年度の「京都：Re-Search」をもとに、地域の文化性や歴史性を深める作品の制作・発表を伴い、アーティストによる新たな視点で地域のアートドキュメント（記録）を創作するプログラム。また、住民の文化芸術に触れる機会の創出と新たな文化芸術創造につなげる拠点を構築する。

## ［調査方法］

福知山市での公開プログラムに合わせ、ヒアリング調査を実施。作り手」と「地域」双方に働きかけ、つなぐ「担い手」：新しい人材の必要性があるという仮説のもと、どのような人材をどのように育成するかという観点から、現在行われている事業の成果、現場での担い手の働き方の調査、求められる人材像を抽出、検証するため訪問インタビューを実施した。なお事業形態がいわゆる典型的な AIR とは異なり、また事業の枠組み自体が大きく異なることから、厳密に質問項目はおかず、下記3点を意識した形で、自由インタビューを行った。

1. どのような事業であり、スタッフはどのような「専門性」が求められる現場に配置されたのか？
2. そのスタッフは配置される前にどのようなスキルセットを思っていたのか？
3. 実際の運営の現場でスタッフが、自身の「専門性」の不足を感じたことは何であったのか、そしてその不足はどのように克服されたか／されなかったのか？

## ［調査日］

2018 年 11 月 3 日（土）、4 日（日）

## ［調査対象者］

朝重龍太氏（京都府中丹広域振興局　地域アートマネージャー）

## 東山アーティスツ・プレイスメント・サービス［HAPS］（京都市）

〒605-0841　京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339
http://haps-kyoto.com

### ［事業概要］

京都市の「京都文化芸術都市創生条例」に基づいた「京都文化芸術都市創生計画」における「若手芸術家等の居住・制作・ 発表の場づくり」事業として「東山アーティスツ・プレイスメント・サービス実行委員会」を設立。芸術家支援、地域創造、国内外の芸術機関と多様なネットワーク形成、新たな芸術のあり方と、新たな社会のあり方を共に探求するイノベーション活動を主なミッションとして活動を展開している。

### HAPSの活動内容｜

HAPSの主要事業として、アーティストおよび支援者の双方へ対する相談窓口の開設が挙げられる。アーティストに対しては「住む」「つくる」「みせる」の主に3つのサポートを実施。居住・制作のための不動産のマッチング、制作から展示、関連イベント開催に係る各種相談、公募や AIR 情報の提供を行なっている。また。支援者については、「住んでもらう」「つくってもらう」「みる」の3つの観点から物件の貸主、不動産業者へのアーティスト紹介・仲介・調整、作品発注の仲介、アーティストの活動を紹介するための鑑賞ワークショップ、スタジオツアー、WEB での情報発信等による普及活動を実施している。また、京都市内に数多くあるギャラリー、現代美術関係の施設、大学と協力、連動するネットワーキングを通じて、バイリンガルによる情報発信を行なっている。

### ［調査方法］

アーティストおよび支える人のマッチング、スタジオ提供や移住支援などによる地域創生の形、コーディネート、アートマネージャーなどの担い手育成について、担当者へのヒアリング、訪問インタビューを実施した。京都 Re-Search の自由インタビューにおいて意識した内容を踏まえ、下記の事前質問を送り、訪問時に自由インタビュー形式で行った。

日本では、90 年代以降に造形美術分野のアーティスト・イン・レジデンス(AIR)プログラムが増えていく中で、運営に携わるマネジメントスタッフやディレクターがその後、芸術祭やオルタナティブスペースの運営などで活躍していく事例が少なくありません。
AIR は、訪れるアーティストと地域の出会いの場、アーティストの成長の契機が生まれる場というだけではなく、運営側でも人材が育ち、地域社会との関わりや他機関との連携、助成の獲得、アーティストとのつきあいなどの実践的なスキルを形成し、その後 AIR に限られない多様な文化的活動にチャレンジしていく契機にもなっているように思います。
その背景には、美術館や芸術教育機関等の確立した制度的背景をもつ機関と異なり、AIR が「移動するアーティストを受け入れる」場であることから、もともと比較的風通しの良さがあり、それほど制度的・権威的な存在でないということがあるかと思います。
そうした観点から、例えばですが AIR の業務の中でどんなスキルが身についたか、以前よりどんな意識が高まったのかということや、以前スタッフをしていた方がその後どのような活動をされているかといったことをお伺いできればと思っています。

### ［調査日］

2019 年 2 月 1 日（土）

### ［調査対象者］

藏原 藍子氏（HAPS 事務局長）

## Ⅱ. 調査対象で行われている内容・プログラムについて

今回の2件のヒアリング調査の対象は、**どちらも典型的な AIR プログラムではない**ものの、リサーチ型の滞在制作、あるいは AIR と「アーティストの移動／移動するアーティスト」に価値を見出すという根本的な理念面では通底するプログラムである。よって「AIR 運営と人材育成」という視点に対して有益な比較対象となり得る可能性があると考えピックアップした。なお、実際のインタビューでは、京都:Re-Search、HAPS の両担当者とも、「自分たちが従事しているのは典型的な AIR プログラムではない」という前置きをした上でインタビューに進んだことから、本項の調査対象は **AIR 従事者ではなく「AIR 類似事業従事者」という別のものとして扱うべきもの**と考える。

## Ⅲ. 分析結果

以上を前提に、事業従事者としてのスキル項目について、あらかじめ「今後力をつけたい」「今の力では足りない」と感じているという回答が予想される項目を策定し、それに対応する回答をインタビュー結果から抜粋したところ、次のようになった（次頁図表1参照）。

① 予想されるスキルに関する意見の内容を、アート事業に関する知識、アセスメント力、地域診断力、コミュニケーション技法等、計画作成～実施、協力者の開発、個別事業のテーマに分類したが、回答においてはいずれも明確なものは得られなかった。

② 必要と感じている内容を、知識、技術、姿勢（態度）の3つの側面からみると、姿勢（態度）については具体化が難しい形がみられた。「これまでの知識を生かせる環境にない」「地域におけるアートマネージャーとしてのモデルがない」などがあげられている。これは、自身として不十分であるという意味合いとともに、所属する組織からの支援が欲しいと感じていると理解できよう。

③ その他、「アート以外の生活全般に関する知識」、「事業の目的を取り込んだり、読みこなす力」、「アーティストや美大生とのコミュニケーション技法」、「ニーズの引き出し、見極め」、「当事者の力を引き出す」など、実践的で応用力が求められる知識・技術面での回答については、必ずしも不足しているという認識はなかった。

④ コミュニケーション技術、ネットワークに関しては、従事者からは具体的な意見が寄せられた。特にネットワークについては、「継続的に情報が入る繋がり」等、事業の場以外での機会への期待も寄せられた。

（図表１）事業従事者が「今後力をつけたい」、「今の力では足りない」と感じていること

| 予想 | ヒアリング結果 |
|---|---|
| ■アートに関する知識<br>・アートそのものの理解<br>・アーティストの行動の変化に対応し読みこなす力<br>・アート業界関係者との人脈 | ・アートそのものの理解力という点では特に不足を感じることはない。（共通）<br>・そもそも誰がアーティストなのか／アーティストとは誰かを問い続けたい。（HAPS）<br>・少し離れた地区にある市の文化政策上の重点地域での事業をコーディネートしており、単年度事業ではあるが、継続的に関わっていければと捉えている。（HAPS）<br>・海外 AIR とのネットワークはしていないが、キュレーター招聘などで海外とのつながりはある。 |
| ■アセスメント力、地域診断力<br>・地域住民のニーズや生活課題、受容能力等のアセスメント力<br>・ニーズの引き出し、見極め | 地縁が強い地域であり、観光関連ではやや周縁とはいえニーズは安定的にある。ただし、総体的には生活地域としての側面が強いエリアでの活動である。（共通） |
| ■コミュニケーション技法等<br>・地域コミュニティを訪問するにあたっての心構えやノウハウ<br>・アウトリーチの引き出し<br>・アーティストや美大生とのコミュニケーション能力<br>・語学力 | ・地域プロジェクトや展示の経験の薄い美大生に対しては注意や助言を与えている。（京都:Re-Search）<br>・アーティストと社会のあり方について固定的に考えず、むしろ双方のあり方を考え続ける機会として捉えている。（HAPS） |
| ■計画作成～実施<br>・地域の文化芸術的感性を高める支援プログラムの在り方<br>・地域課題の発見→プランニングの技法<br>・地域との調整力<br>・コーディネーション技術<br>・アーティストや住民の力や可能性に着目する視点<br>・地域文化資源の力を引き出す技術<br>・関係機関との連携を図る力、調整力<br>・社会資源をアーティストのニーズにあてはめていくのではなく、アーティストのニーズを中心に社会資源を使いこなす調整力<br>・記録の作成・整理・保管 | [本項目については、今回のヒアリングでは明らかにできなかった] |
| ■協力者の開発<br>・協力者の開発力<br>・政策につなげるための力<br>・様々な機関(社会資源)と幅広く人脈を構築すること（政治家等も含む） | ・少数の協力者を見つけることはできるが、機関的な協力や幅広い人脈を形成するには至っていない。（京都:Re-Search）<br>・事業に必要な協力者は見つけやすい環境にある。（HAPS） |
| ■個別事業の運営<br>・自主事業と委託事業のバランス<br>・アートを含む事業を理論的に説明する力<br>・ファシリテーション技術<br>・広報力<br>・説明力（行政、地域等に対して） | ・100%が府の事業（京都:Re-Search）<br>・自主事業（補助金事業）と委託事業をどちらも行なっている。比率で言うと、2018 年度の予算ベースで 1/4 程度が委託になっている。現状は社会包摂的な要素を持つ委託事業については受託している。スタートから7年間が経ち、存立基盤である行政の都市創生計画も次の期に入り、その影響を受けている。（HAPS） |
| ■コミュニケーション技術<br>・伝える力、コミュニケーション技術<br>・わかりやすく伝える表現力。かけひき交渉術 | [本項目については、今回のヒアリングでは明らかにできなかった。] |
| ■ネットワーク<br>・継続的に情報が入る繋がり<br>・ネットワーク力 | ・情報の不足を感じている（京都:Re-search）<br>・市の担当者とは緊密に連携をしており、また地域の芸術家との日常的な情報交換も行なっている。（HAPS） |

## Ⅳ. まとめ

### （1）アートマネジメント専門人材のスキルセット

東日本大震災以降の地域芸術祭・アートプロジェクトブームのなかで、「アートマネジメントの専門性」をもった人材の不足と育成の必要性が叫ばれている。だが、まず気をつけなければならないのは、日本では「アートマネジメント」は公立美術館の経営などよりもむしろ文化イベントの企画運営事務を指すこと、また「専門性」は「スキルセット＝その仕事に必要なスキル一式」であり、そもそも事業ごとに全く目的や内容が異なれば、当然スキルセットは同一ではなく、同一でないスキルセットを必要とする事業間に共通の「専門性」は成立しにくい。

他方で、目的や内容が大きく変わらない事業が複数あれば、そこに事業や組織を超えた共通のスキルセットが存在しやすくなる。人材不足という場合「事業を企画し、予算を立てて、事業の大枠が決まったが、それを実行する適切な専門性を持った人材を確保できない」という意味である場合が多いと思われる。そのような場合に不足している「人材」に求められている「専門性」とは、「すでに決められた予算と事業の大枠を前提とした上で、事業の細部を詰めて、もし不足しているリソースがあればそれを何らかの形で確保して事業を成功裏に実施する能力」といえる。よって、同種の事業であれば「専門性」が指す内容は類似のものとなり、開催する地域やその規模の大小が多少違ったとしても、必要な能力のメニューは類似したものになることが想定される。例えば、作品を展示する際の現場および広報上の体裁を整える能力、予算の管理能力、行政的な経理・調達ルールへの習熟等であろう。

### （2）芸術祭と AIR で共通する専門性

では、芸術祭と AIR について、共通の専門性はあるだろうか？

前者については、行う主体や予算の枠組み、実施の形式、さらに実施組織については「自治体／広域自治体が文化芸術予算を新たにつけて芸術祭を開催し、専門のアートマネージャーを中心に事務局を編成し、複数名のアーティストを選定・招聘し、地域のシンボリックな場所で住民や学生とインスタレーションを共同制作し、設置された場所の地図を制作し、地域の行政・文教施設にチラシや地図を配布し、開催中にはインフォメーションセンターや各設置場所に、案内役のボランティア／アルバイト人員を配置して訪問者に案内をする」という、新潟の大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭によって定着したフォーマットが取られている。なぜならその二つの芸術祭が、規模と洗練度において他の芸術祭を凌駕しており、大きなインパクトを与えたからである。こうした事業においては、スタッフに必要な「専門性」の指す内容はある程度定義することが可能であると思われる。

他方、公費の AIR においては、そもそもこれまでの経緯や実際の実施主体と組織を見ても、これといった専門性＝スキルセットを見出すことは実は難しいと言わざるを得ない。そもそも AIR では展示を行うということは必須ではない。AIR では、アーティストが旅をすることで新たなアイディアを得、探求する時間を持つことを目的として、展示を含めた「アーティストが成果として作品を提示すること」については義務として課さないことが多いからである。AIR の規模や設置主体によっては、オープンスタジオのような催しや、地域住民や学生との共同制作や、場合により成果の展示まで行うといったケースはある。そのような同種の活動をしている主体間では、共通のスキルセットも見出せるであろう。ただしそれらは芸術祭とは異なるものである。

### （3）マインドセットの違い

ここまで（典型的な）芸術祭と AIR における専門性＝スキルセットの異動に目を向けてきた。加えて強調したいのは、この両者で最も違うのは、目的の違いからくる「地域社会およびアーティストとの関係の作り方」である。芸術祭においてはイベントとしての成功は主催名義の行政および地域社会に還元されることが前提である。言い換えれば、最終的に行政と地域社会が我が事としてポジティブに受け止められるような結果＝成功が目的であり、その成否においては行政と地域社会の側もリスクを負う。他方で AIR ではアーティストないし AIR プログラムの主体が責任とリスクを負う。ここが最も異なり、その結果はアーティストとの関係にも現れる。すなわち AIR では仮に行政からの援助を受けていたとしてもそこはアートマネージャーやアーティストがリスクを負うが、芸術祭においては、アートマネージャーやアーティストが負い切ることができない責任とリスクが生じるため、自ずと強い制限がかかる。そこを調整することは芸術祭における重要なスキルの一つを構成する。これはスキルセットというよりはマインドセットの領域の問題となる。

仮説として、その時々に違う事象への「円滑な調整や対応」は、例えば地域の文化的状況への深い理解、招聘するアーティストとの個人的な関係性や作品理解の深さ、地域社会にそのアーティストを配置する（リサーチ、展示）ことで起こりうる地域での反応の予測と誘導、アーティストが制作するであろう、作品の内容や形態への理解とそのサポートおよび誘

導、アーティストに有りがちな、度重なる変更等への対応のうまさなどについては、「専門性」の一部であることは間違いない。だが他方、例えば地域のキーマンとの接触、行政や地域有力者・政治家との関係づくりなどは「専門性」とは意識されていないという所管であった。例えば介護のような公的な地域福祉システムの担い手などにおいてはこれらもスキルセットとして意識されているところである。

ただし、現場からの声の中には、「そもそも事業の主体がどのようなプログラムを目指していくかということ以上に、その事業の基盤の強さ、言い換えれば人材を育てられるだけの組織・事業主体であるかどうか、また継続性が担保されている度合いによって、そこに必要とされるスキルセットも異なってくるのではないか」という意見があった。重要な指摘であると考える。今回の調査では、事業そのもののマネージメントの強度や継続性は捨象し、共通のスキルの存在を措定していたものの、本来的に全ての事業において人材育成そのものは目的ではなくその手段であるということを考えると、マネージメントの問題は避けて通れない。今後同様の調査をより実質的な観点から進めていくのであれば、現場従事者のスキルのみならず、マネージメントの問題に踏み込まざるを得ないのではないか。それが調査で得た偽らざる実感である。

現状のアートマネージャー／AIR 従事者（さらには AIR 類似事業従事者）の育成のためには必要な専門性を明確にする方法論が必要である。これについては、本調査では明らかにできなかったが、地域福祉等の他分野の知見も導入しながらより精度の高い実践的な知見の共有が進むことを期待している。

# ケーススタディ ② AIR と美術大学の連携による若手人材育成の取り組み

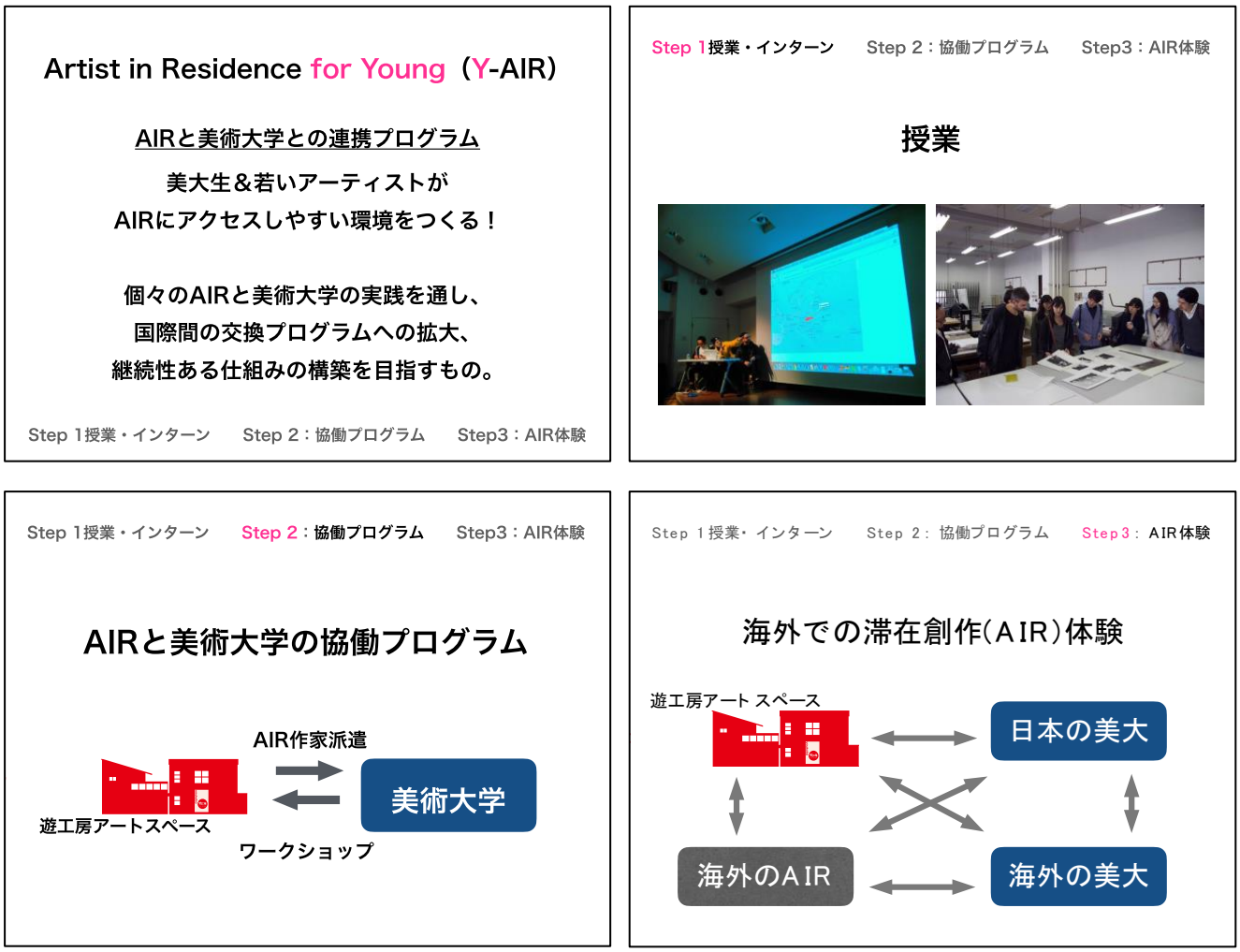
Y-AIR｜Air for Young

## Y-AIR｜AIR for Young
## AIR と美術大学の連携による若手人材育成の取り組み

（取材、文責：日沼禎子/ 監修：遊工房アートスペース）

### Ⅰ．Y-AIR（AIR for Young）の定義

遊工房アートスペースが提唱する、マイクロ（小規模組織）AIR とマクロ（大規模組織）な存在である美術大学が連携し、将来、アーティスト、アートマネージャー等のプロフェッショナルとして活動を標榜する美術大学生に対し、海外での滞在制作体験、インターンシップの場を提供する実験的な研究プロジェクト（図1）。AIR というプラットフォームが美術大学教育の中に必要な存在となるように働きかけ、かつ、国際間の交換プログラムへの拡大、継続性ある仕組みの構築を目指している。




（図 1）Y-AIR 研究プロジェクトの連携イメージ

### Ⅱ．Y-AIR 実践プログラム

いずれのプログラムも、遊工房アートスペースがハブの役割を担い、国内外の芸術・美術大学とマイクロ AIR とのマッチングを図り、事業推進を行なっている。

海外派遣、参加プログラムにかかる渡航費、旅費、滞在費、受講料などの費用面では、派遣側の大学による予算措置、または参加者個人の負担により、プログラムによっては支援組織からの助成や相互の受入先の減免を行うなど各プログラムによって異なる。また、在学生（学部・大学院）の派遣だけではなく、卒業して間もない若手アーティストのキャリア支援として位置付けるプログラムもある。さらに、持続可能な仕組みづくり、Y-AIR の国内外での発展を目指し、参加者による滞在中あるいは帰国後のトークイベントの実施や報告書を出版することで、活動の成果、ノウハウを広く共有する取り組みも行われている。2018 年度現在のプログラム実施例は下記のとおり。

## ① インターンシップ＆海外アーティストによる授業実施｜遊工房

AIR と美術大学との連携の試みとして、海外からの滞在アーティストによる大学での授業実施と、AIR の現場における職業体験の場として、遊工房アートスペースでのインターンシップを実施。ファインアート系、マネジメント系の双方の学生が参加し、AIR 滞在アーティストの創作プロセス、成果発表、パブリックプログラムなどの交流など多岐にわたる AIR 現場での活動に携わっている。

**[事業開始年]** 2013 年
**[連携・協力機関]** ロンドン芸術大学・セントラル・セント・マーチンズ校（CSM）、シティー＆ギルズロンドン・アート・スクール
**[参加大学]** 東京藝術大学、女子美術大学、武蔵野美術大学

## ② チェコケース｜ArtCamp への派遣および OPEN AiR との相互交換プログラム

Art CAMP は、西ボヘミア大学 デザイン芸術学部（Ladislav Sutnar Faculty od Design and Art, West Bohemia University /チェコ、ピルセン市）が 2005 年より毎年夏に実施している3週間の実技講座プログラムへの学生、若手アーティストの派遣プログラム。ArtCamp は欧州を中心とした各国の大学生の国際性を研鑽する場であるとともに、美術大学入学を志す高校生の体験入学の場として、また、地域へのオープンカレッジとしての役割を担い、毎年、多様な年代、経験を持つ多くの受講生が参加している。

日本からはこれまで延 9 大学、28 名の学生が参加。2016 年からはコース講師としてアーティスト、美術大学の教員派遣を実施。また、若手アーティスト支援では、チェコ、日本からの相互交換プログラムを実施し、OPEN AiR および遊工房アートスペースでの滞在創作の場を提供。滞在中は、オープンスタジオ、展覧会、ならびに、美術大学でのワークショップ、講義を行うなど多様な交流が実施されている。

**[事業開始年]** 2013 年
**[連携・協力機関]** 西ボヘミア大学 デザイン・アート学部、欧州文化首都 Pilzen 2015 組織委員会（2014-15）、OPEN AiR（2014-15）、3331 アーツ千代田、チェコセンター東京
**[参加大学]** 東京藝術大学、女子美術大学、武蔵野美術大学、東北芸術工科大学、金沢美術工芸大学、福井大学、東京造形大学、埼玉大学、秋田公立美術大学
**[AIR 相互交換]** 2014 年：松本恭吾（美術家） ＊日本からの派遣のみ
2015 年：ミヒャル・ツァーブ（メディア・アーティスト）、三原総一郎（美術家）
2017 年：ボイチェヒ・ドムラーチル（美術家）、渡辺望（美術家）
**[派遣講師]** 2015 年：町田久美（美術家）
2016 年：矢島一裕（建築家）
2017 年：松下裕子（美術家）
2018 年：稲垣立男（美術家、法政大学教授）
**[リサーチャー]** 2014 年：ペテル・シモン（ECoC 2015 Pilzen 国際事業担当）、アディラ・フォルディノヴァ（OPEN AiR）
2015 年：レンカ・コディトゥコヴァ（ArtCamp 代表デイレクター）、マルケタ・コフトコヴァ（ArtCamp コーディネーター）、辻真木子（女子美術大学 博士前期課程 アートプロデュース研究領域 2 年、遊工房アートスペース インターン研修生）
2016 年：小熊隆博（アートマネージャー）
2017 年：松下裕子（美術家）
2018 年：マルケタ・コフトコヴァ（ArtCamp コーディネーター）、水谷朋世（黄金町エリアマネジメントセンター）
**[助成実績]** EU ジャパンフェスト実行委員会（2014-15、2 カ年）
**[関連URL]** 西ボヘミア大学 デザイン・アート学部 〈https://fdu.zcu.cz/〉
ArtCamp 〈https://fdu.zcu.cz/en/415-artcamp-about〉

## ③ ロンドンケース｜スタジオ支援プログラム

二都市間（ロンドン/東京）の若手アーティスト交換プログラム。ロンドン芸術大学セントラルセントマーチンズ（Central Saint Martins）× アクメスタジオ（Acme Studios）*による若手アーティスト支援プログラム「Associate Studio Programme（ASP｜2013 年開始）」と 東京藝術大学 × 遊工房アートスペースとの連携で実施。卒業して間もない若手アーティストは、スタジオ確保をはじめとするさまざまな局面で、継続的な活動のための現実的な困難に立ち向かうことになる。そうした背景から、卒業後の状況に対応した若手アーティストの支援を目的としている。両都市 2 名ずつのアーティストが参加し、連続する東京・ロンドンでの各 6 週間、計 3 ヶ月にわたるプログラムで、それぞれの都市のスタジオでの創作

活動と発表活動を行う。また、双方の参加作家間の創作の発表活動を軸として、アーティストや美術専門家等との交流による活動の充実を図っている。

＊Acme Studios：「Supporting Art & Artists since 1972」をタイトルにロンドンで活動する非営利事業組織。400 件以上のスタジオ貸しをベースにアーティスト支援を展開して 40 年以上の実績 がある。地元デベロッパーと共同し、学生寮などの公的な施設ビルへ創作スタジオの併設などを推進し、ロンドンにある大学との連携も積極的に展開。英国人作家他、海外から 長期滞在作家のスタジオ提供も海外機関と連携しながら進めている。Acme Studios のロンドンにおける美術大学との協働事例として、他にも Adrian Carruthers Studio Award、Chelsea Studio Award、Goldsmiths MFA Studio Award、Helen Scott Lidgett Studio Award など、優秀賞としての賞金や無償スタジオ提供などがある。

[事業開始年]　2015 年
[連携・協力機関]　ロンドン芸術大学・セントラル・セント・マーチンズ校、ACME スタジオ、東京藝術大学、遊工房アートスペース
[AIR 相互交換]　2015 年：リディア・デイヴィス、クリス・アイフォルド、東山詩織 、小津航
2016 年：ショーン・ラヴェール、エレノ・ターンブル、郷治竜之介、堀内崇志
2017 年：ジョンバティストゥ・ラガデキ、アビー・ジョーンズ、磯村暖、新井麻弓
2018 年：アリス・ジェイコブズ、トゥリー・リットトヴァック、川越健太、堀内悠希
[関連 URL]　CSM 〈http://www.arts.ac.uk/csm/〉
ACME Studios 〈http://www.acme.org.uk/〉
ASP 〈http://www.acme.org.uk/residencies/associatestudio〉

## ④ フィンランドケース｜美術大学×国際芸術祭×AIR との連携

2017 年より開始された Waria Art Break AIR と遊工房との相互協力を基盤とし、2018 年、若手アーティスト支援プログラムを開始。フィンランドからの派遣として、ラップランド大学から推薦を受けたヴェンニ・アールヴェルグが、長野県東御市で開催された「天空の芸術祭 2018」のレジンデントとして 2 ヶ月間滞在。日本からは東京藝術大学からの推薦により、亀倉知恵が Waria Art Break AIR およびラップランド大学での 3 ヶ月間の滞在制作を行い、その成果を天空の芸術祭 2018 で発表した。

[事業開始年]　2017 年
[連携・協力機関]　フィンランドセンター、ラップランド大学、Waria Art Break AIR、天空の芸術祭 2018 実行委員会（長野県東御市）、東京藝術大学、遊工房アートスペース
[AIR 相互交換]　2017 年：トウイア・テイスカ、升谷絵里香
2018 年：ヴェンニ・アールヴェルグ、亀倉知恵
[関連 URL]　フィンランドセンター 〈http://www.finstitute.jp〉
ラップランド大学 〈https://www.ulapland.fi/EN〉
Waria Art Break AIR 〈https://www.waria.fi/〉

## ⑤ バスクケース｜バスクの若手アーティスト支援プログラム＜ERTIBIL BIZKAIA＞

スペイン・バスク自治政府による若手アーティスト支援プログラム「ERTIBIL BIZKAIA」受賞者に与えられる日本での AIR に対する協力要請を受け、2018 年から始まった若手アーティスト支援活動。

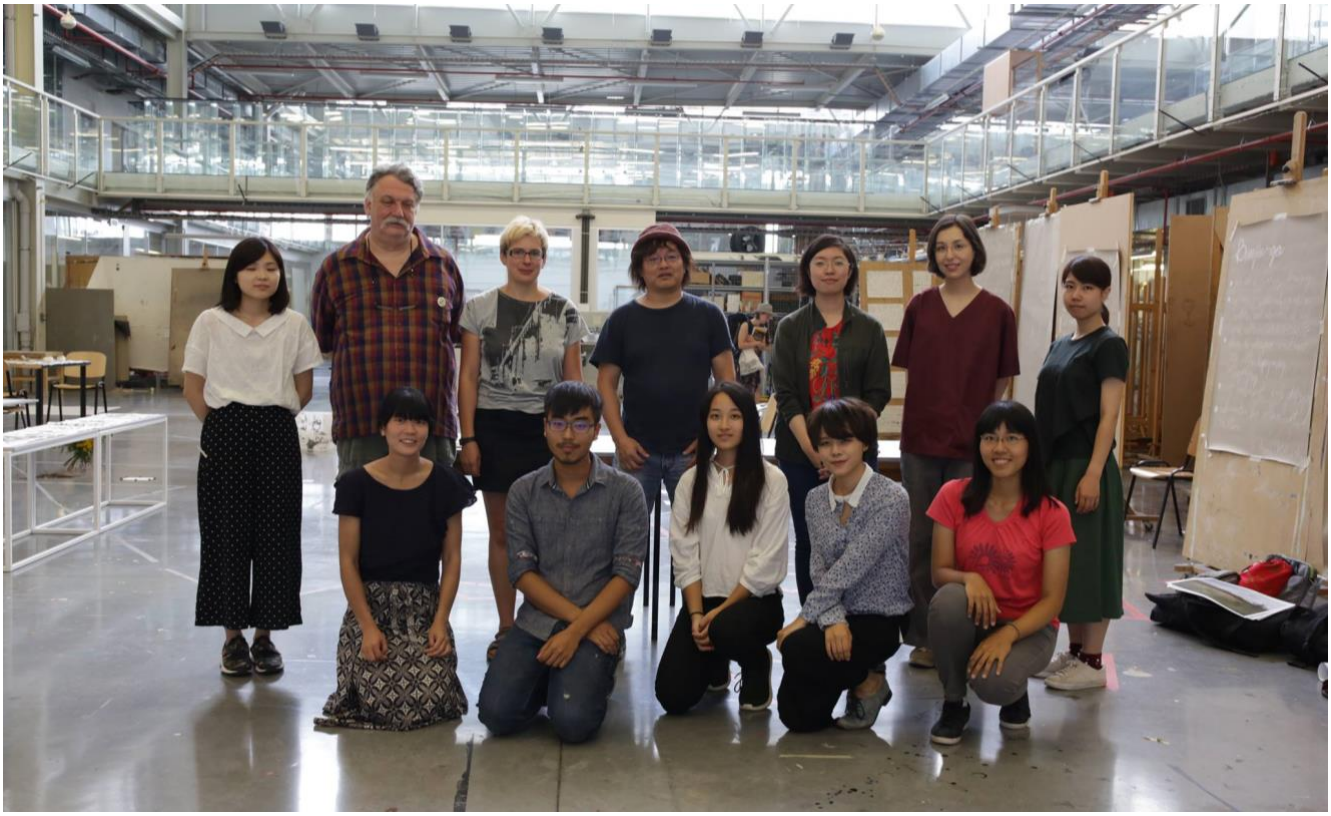
[事業開始年]　2018 年
[連携・協力機関]　スペイン・バスク自治政府ビスカヤ県文化部、遊工房アートスペース、女子美術大学、Studio Kura（福岡）
[派遣アーティスト]　マリア・モリエダス・ディエス、イザロ・イエレギ、マイダー・ゴンザロ

## ⑥ マニラケース｜フィリピンと日本の美術大学生の相互交流：DISPLACED×陸前高田 AIR プログラム

女子美術大学が実施する「大学とアーティスト・イン・レジデンス等との共同によるグローバル人材育成事業」の一環として実施。文化的背景の異なる同世代の学生、若手アーティスト同士が、相互にインターンとして運営に携わることにより、留学とは異なるより深い経験の場を提供し、アートを通した社会活動の意義と国際社会貢献のあり方を実践的に学ぶプログラム。

[事業開始年]　2019 年（2018 年度） －
[連携・協力機関]　アジア・パシフィック・カレッジ（Asia Pacific College）、BlissMarket Laboratory、女子美術大学、陸前高田 AIR プログラム（なつかしい未来想像株式会社）、黄金町エリアマネジメントセンター、遊工房アートスペース
[関連 URL]　APC 〈https://www.apc.edu.ph/〉
BlissMarket Laboratory 〈Facebook: BlissMarket Laboratory〉
陸前高田 AIR プログラム 〈http://rikuzentakataair.com/〉

## Ⅲ. 2018 年度ケーススタディ：女子美術大学・重点戦略
## 「大学とアーティスト・イン・レジデンス等との共同によるグローバル人材育成事業」



ArtCamp 2018 参加者。東京藝術大学、秋田公立美術大学、女子美術大学が参加。遊工房アートスペースからコース講師として稲垣立男氏が派遣された。

2018 年度に女子美術大学との連携により実施した 2 つのプログラムについて報告する。女子美術大学では、教員から提案された大学改革に資する取り組みを「重点戦略事業」して事業化を行なっており、2018 年度は報告者が提案した「大学とアーティスト・イン・レジデンス等との共同によるグローバル人材育成事業」が採択されたことにより、これまで担当教員の個人研究の一環として行ってきた Y-AIR へ実践の取り組みを大学の事業として位置付け、下記の事業を行なった。

**【趣旨】**

近年、世界の潮流として、国際芸術祭、AIRなど、国際性と地域性とをつなぐ新たな文化芸術の創造活動の場が拡張されており、こうした場で活躍し、支える多様な人材（財）が求められることから、将来、本学の学生がアーティスト、キュレーター、アートマネージャー、プロデューサーとして新たな創作活動・表現の場において活躍できるような経験、学びの場が在学時代から必要であると考える。本事業では、アーティストを育成するプラットフォームの場でもあるAIRに着目し、国内外のAIR組織・プログラムおよび各地の芸術・美術大学と連携した相互交流プログラムを実施。

**【見込まれる効果】**

- 国際的なアートプラットフォームとしてのAIRの実際を知り、学生自身がキャリア形成について自ら考え、行動するための一助とする。
- 交換留学制度とは異なる海外での創作体験、および、同世代の学生同士の異文化交流を促進することで、芸術による国際関係の構築の手法を学び、アーティスト、アートマネージャーとして、芸術交流による国際貢献に資する活動に取り組む人材を育成する。

**【派遣学生・教員について】**

- 派遣学生｜美術学科 洋画専攻およびアートプロデュース表現領域在学生（学部生、大学院は問わない）。研究室ごとに公募で決定、あるいは推薦を受けた学生の中から選考、派遣を実施する。

派遣教員、研究者｜上記学生の指導担当教員または研究室から指名を受けたアーティスト、アートマネージャー等を同時に派遣し、学生に職業的意識を与えるような指導を行うものとする。

## ①　チェコケース｜「ArtCamp2018」（西ボヘミア大学芸術学部）への学生・研究者派遣

**［派遣期間］**　2018 年 7 月 9 日（土）−27 日（水）
**［派遣学生］**　若松はるか（大学院博士後期課程美術研究領域 1 年）、久保美貴（女子美大学 博士前期課程美術研究領域 2 年）、飯島早矢加（アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域 4 年）
**［派遣研究者］**　水谷朋代（黄金町エリアマネジメントセンター コーディネーター）

これまで報告者が指導するアートプロデュース表現領域からの学生（アーツマネージャーの視点から）を派遣していたが、将来、アーティストとしての活動を標榜する領域からの派遣を行うこととし、美術研究領域（洋画）に属する大学院生を対象とした。また、実際の AIR の現場で活躍する若手アートマネージャーを加え、学生と共にプログラムを体験することから、多面的な視点から ArtCamp での成果を検証できるものとし、帰国後の報告会を下記のとおり実施した。

Art Camp を主催する西ボヘミア大学（1991 年設立）はチェコ共和国・プルゼニ市にある総合大学で、2004 年に芸術学部が設立された。その翌年より毎年夏に継続して開催されている ArtCamp は、3 週間にわたる国際的なサマースクールで、美術、デザインの分野で毎週 10 コース以上のプログラムが提供されている。各コースの講師は芸術学部教員の他、国内外からの招へいアーティスト、デザイナーが指導にあたり、受講生もチェコ国内のみならず、ヨーロッパ諸国、北米、アジアからの多様な国、年齢層からの参加を得ている。コースにおける指導では、チェコ語、英語、また年によっては他言語で行われ、レベルも初心者からプロまで（教員自身が自己点検のために受講する場合もある）の幅広い設定がされている。放課後の授業や週末のイベントも充実しており、市街地のギャラリーやカフェ等を会場した多くの交流の場が用意されている。

2018 年の女子美術大学からの派遣学生および研究者は、アートセラピー、ニュー・サーカス、製本、文人画（遊工房から派遣されたアーティスト・稲垣立男による指導）、ドローイングなどを受講。通常の専門領域では体験できない実技講座を受講し、また、国内外から参加する同世代の学生との交流を深め、自身の表現に対する新たな取り組み方、国際的な視点から見る日本文化など多くの学びを経験した。

また、本事業の派遣研究者として参加した水谷朋代の参加は、アーツマネジメントの実践的な視点からの取り組みとなり、3 週間共に過ごした学生に対しては将来の職業意識を与えることとなった。また、帰国後、自身が所属する黄金町エリアマネジメントセンターでの報告会を行い、成果を共有し検証することにより、今後の自身の活動の場へフィードバックする機会を得た。（水谷氏による報告会の記録は P.45 参照）

**報告会｜「チェコ ArtCamp の魅力—ArtCamp を通して考える AIR と美大の協働」**

2018 年 11 月 9 日（金）18:30-21:00
会場｜チェコ共和国大使館 映写室（東京都渋谷区広尾2-16-14）＊入場無料

**［ゲストトーカー］** マルケタ・コフトコヴァ（西ボヘミア大学、ArtCamp 担当）、ボイチェヒ・アウブレヒト（西ボヘミア大学、国際交流部長）
**［特別ゲスト］** マーク・ダンヒル（ロンドン芸術大学・セントラル・セント・マーチンズ校 前学長）
**［協力］** チェコセンター

チェコセンターからの会場提供の協力を得て、同タイトルでの報告会が開催された。
第一部では Y-AIR の取り組みについて、遊工房アートスペースコーディネーターの辻真木子によるプレゼンテーション、ArtCamp 担当者であるマルケタ・コフトコヴァ氏による事業紹介に続き、2018 年度派遣学生、研究者によるそれぞれのコース受講体験と、アーティスト、アーツマネージャーの視点からの成果、今後への展望について発表を行った。
第二部では、Y-AIR ロンドンケースの協働側である、ロンドン芸術大学・セントラル・セント・マーチンズ校の前学長であるマーク・ダンヒル氏を特別ゲストとして、ArtCamp 参加者および運営者とのトークセッションを行った。特に、ダンヒル氏は、美術大学卒業・修了後の 2–3 年の間にアーティストとしての活動を断念する者が多い現状について触れ、「アーティストとしてまだ成長期にある卒業後 2-3 年の間に、いかに支援することができるかがその後の活動の継続に繋がる」と発言した。美術大学の国際交換プログラムによる成果をさらに検証し、継続性ある仕組みの構築に向けた議論を継続することの重要性について意見が交わされた。

## ② マニラケース：DISPLACED×陸前高田 AIR プログラム

Asia Pacific College （APC）におけるプレゼンテーション終了後の記念写真。

**［派遣期間］** マニラ: 2019 年 2 月 10 日（日）―24 日（日）
東京および陸前高田市: 2019 年 3 月 7 日（木）―26 日（火）

**［派遣リサーチャー・学生］**

Jaime C. Pacene Ⅱ（アーティスト、APC マルチメディアアーツ教員）、Angela Marie Alano（アーティスト、BM Lab アシスタント）、Beca Jane Frigillana（APC 学生/BM Lab インターン）、Tyron Santos （APC 学生/BM Lab インターン）
山田 悠（アーティスト、リサーチャー）、若松はるか（女子美術大学 大学院博士後期課程 美術研究領域 1 年）、林恵美（女子美術大学 芸術学部アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域 4 年）、梶並千夏（女子美術大学 芸術学部 洋画専攻 3 年）

近年、アジア諸国と日本との交流が盛んに行われる中、在学時代よりアジアとの文化交流の意義、今後の活動につなげるための経験の場となることを目的として実施。Y-AIR の交換プログラムの方法に則り、マクロの存在である両国の大学 Asia Pacific College（APC）と女子美術大学、マイクロの存在である AIR およびアートコレクティブである、BlissMarket Laboratory（BM Lab） と陸前高田 AIR プログラムが相互に連携し、学生および教員の派遣、滞在制作・リサーチを行った。最終報告会では、陸前高田 AIR プログラム滞在アーティストとともに展示発表およびトークイベントを実施した。陸前高田 AIR は、東日本大震災後の被災地において国内外から招へいしたアーティストの創造的活動によって震災後の人々の生活に寄り添いながら、地域に根ざした文化的背景を記述する試みであり、報告者は事業創設時の 2013 年よりプログラムディレクターを務めている。また、BM Lab を主宰するアーティストであり APC のメディア・アートの教員でもあるハイメ・パセナⅡ世は、陸前高田 AIR の第 1 回目の招へいアーティストであり、翌年以後から同 AIR との共同により同じく自然災害の多いフィリピンにおけるアーティストの社会活動のあり方を模索する「DISPLACED」を実施してきた。このような背景に基づき、共に AIR およびアートコレクティブ運営者であり教員であるという立場から、アートを通した社会活動に対する学生の経験の場を開くことを目的とし、2018 年度の実験的な交流プログラムを実施するに至った。
女子美術大学からは、在学生3名に加え、社会的リサーチをベースとするアーティスト、山田悠を研究者として派遣。APC からは同大学在学生であり BM Lab のインターンである 2 名、BM Lab の運営者として、パセナを含む 2 名の計 4 名を招へい。マニラ、東京、陸前高田の3拠点において、美術館、ギャラリーなどのアートシーン、アート・デザインによる社会活動拠点の見学、災害地、貧困地域でリサーチを行い、成果発表を行った。

## [プログラムスケジュール]

### MANILA Program | FEBRUARY 10 to 24, 2019

Activities plan:

A. Visit Artist in Residence Program of CANVAS Gallery in Batangas
B. Community Research "THE IMAGES of MANILA"
C. Museum Trips and Art Fair Philippines Tour
D. Do Presentation in Asia Pacific College

FEBRUARY 10 / Sunday:
- Arrival in Manila
FEBRUARY 11 / Monday:
- Meeting with BMLab and Asia Pacific College Students at APC
- Briefing of Schedule
FEBRUARY 12 / Tuesday:
- Museum and Gallery Visit & Artist Studio Visit
///UP Vargas Museum
///Ateneo Art Gallery
///Blanc Gallery
///Jose Tence Ruiz Studio Visit
FEBRUARY 13 to 15 / Wednesday to Friday:
- Community Research "The Images of Manila"
///Brgy. Payatas
///Brgy. Bagong Pag-Asa
///Brgy. San Vicente
///Intramuros
///Divisoria and Binondo
///Quiapo
FEBRUARY 16 to 18 / Saturday to Monday:
- Studio Visit
FEBRUARY 19 / Tuesday:
- Early Morning trip to Batangas, Meet CANVAS and Artist in CANVAS AIR
And attend Presentation of CANVAS Children's Museum
FEBRUARY 20 / Wednesday:
- Visit Pinto Art Museum in Antipolo, Rizal
FEBRUARY 21 / Thursday:
- Preparation for Presentation
FEBRUARY 22 / Friday:
- Presentation at Asia Pacific College
- Art Fair Philippines Visit
FEBRUARY 23 / Saturday:
- Free Day
FEBRUARY 24 / Sunday:
- Departure to Tokyo

### JAPAN Program | March 7 to 26, 2019

### Tokyo Stay: MARCH 7 - 11

Activities plan:

A. Visiting JOSHIBI University of Art and Design
B. Exchange with JOSHIBI Students in Flea Market that is community program with the Neighborhood
C. Visiting Youkobo Art Space
D. Museum trip in Tokyo (freeday)MARCH 7 / THURSDAY

- Arrival of Jaime Pacena and MBLab interns from Manila
MARCH 8 / FRYDAY
- Meeting with Jaime Pacena and MBLab interns with Teiko Hinuma at JOSHIBI Univ.
- Visiting Youkobo Art Space (AIR organization)
MARCH 9 / SATURDAY
- Visiting the flea market by JOSHIBI Students at Higashi - Koenji and Tokyo Trip
- Visiting Graduate Show in JOSHIBI University
MARCH 10 / SUNDAY
- Museum Tour in Tokyo
MARCH 11 / MONDAY
- Free day *almost Museum closed in Monday

### Rikuzentakata Stay: MARCH 12 - 25

Activities plan:

A. Video and photo shooting for documentation / archive for RTAIR/DISPLACED 2019.
B. Create a sort of "Fiesta" or Festival presenting workshop with children, short films, foods, etc…
C. Presentation about DISPLACED as archival exhibition in RTAIR Program
D. Participation and presentation at talk event
(Participants of JOSHIBI will accompany with BM Lab team from March 18 - 25)

MARCH 12 / MONDAY
- Trip to Rikuzentakata from Tokyo.
- Meeting with Jaime Pacena and MBLab interns with RTAIR artists and staff.
MARCH 13 / FRYDAY to 17 / SUNDAY
- Visiting RTAIR artists' studio and Rikuzentakata research and post-production.
MARCH 18 / MONDAY to 20 / WEDNESDAY
- Preparation for the RTAIR Exhibition.
MARCH 21 / THURSDAY
- Opening of RTAIR Exhibition and Talk event.
MARCH 22 / FRIDAY and 23 / SATURDAY
- Preparation for the fiesta "Art Marche".
MARCH 24 / SUNDAY
- the fiesta "Art Marche".
MARCH 25 / MONDAY
- Trip to Tokyo from Rikuzentakata.
MARCH 26 / TUESDAY
- Departure of Jaime Pacena and MBLab interns from Tokyo.

**インターンシップ＆報告会｜陸前高田 AIR ＜三陸×アジア：気仙アートとライフをここに持ち寄る＞**

**［開催日］** 2019 年 3 月 21 日（木・祝） -24 日（日）
**［会場］** 陸前高田市立横田小学校旧校舎、栃ヶ沢公園、栃ヶ沢アパート集会所
**［共催］** 国際交流基金アジアセンター

本交流事業の最終目的地である陸前高田市において、陸前高田 AIR プログラムが企画・運営するアートプロジェクト＜三陸×アジア：気仙アートとライフをここに持ち寄る＞実施にかかるスタッフとして活動するとともに、リサーチ成果報告としてのプレゼンテーション、展覧会への参加を行った。
プロジェクト初日には、陸前高田市出身の写真家・畠山直哉氏および陸前高田 AIR アーティスト、東方芸術工科大学学生、地域住民など多様な参加者を交えたトークイベントが実施され、美の価値、異なる国の文化的背景、分脈の中におけるアートの社会的有用性について、多岐にわたる議論が交わされた。また、AIR アーティストの展示に加わる形で、マニラでの経験にもとづいた作品制作、発表を行った。
国際間の交流のみならず、災害や貧困などの社会課題が日常的に存在する場での滞在経験は、大きな刺激となり、アートの根源的な意義について考え、自ら実行する機会となった。

## ケーススタディ ③ AIR と地域再生、AIR 従事者の働き方の視点から

1. 黄金町エリアマネジメントセンター
2. PARADISE AIR
3. UBE ビエンナーレ アーティスト・イン・レジデンスプログラム

## 1. 黄金町エリアマネジメントセンター

〒231-0054 横浜市中区黄金町1-4番地先高架下スタジオ
http://www.koganecho.net/

2008 年に黄金町バザールが始まったのをきっかけに、2009 年から NPO 法人黄金町エリアマネジメントセンターが設立され、当時からアートによるまちづくりを推進している。元違法風俗店街というイメージをどのように変えていくか、変換していくかということを背景に、アーティスト・イン・レジデンス事業や街づくりの文脈での活動を行い 10 年が経過した。アート事業を実施するにあたり、社会課題への取り組み、まちづくりなど複層的な事業において、スタッフがどのように育成されてきたかを掘り下げるための事例として取り上げた。

**インタビュイー｜**佐脇三乃里（黄金町エリアマネジメントセンター 2017 年退社、現在アート・コーディネーター）
水谷朋代（黄金町エリアマネジメントセンター・キュレトリアルチーム）
**聞き手・文責｜**辻真木子、日沼禎子
（インタビュー実施日：2019 年 3 月 17 日）

### 1） 事業概要

2008 年に黄金町バザールが始まったのをきっかけに、2009 年から NPO 法人黄金町エリアマネジメントセンターが設立され、当時からアートによるまちづくりを推進している。元違法風俗店街だったことのイメージをどう変えていくか、変換していくかという背景で、アーティスト・イン・レジデンス事業や街づくりの文脈での活動をしている。中でもアーティスト・イン・レジデンスは大きな事業の1つで、元違法風俗店舗だった空き家をスタジオに変え、そこに常時 50 組くらいの国内外アーティストが拠点を構えている。レジデンスは 1 年契約の長期プログラムと、昨年度は 3 ヶ月の短期プログラムがあり、両プログラム共に滞在の終盤に成果発表展を設定している。また、毎年開催しているアートフェスティバル黄金町バザールは、3 ヶ月間国内外から招聘したアーティストが滞在し、その成果を展覧会として発表している。その他、芸術学校というプログラムなど、様々なアートプロジェクトを実施している。

## 2）AIR 施設概要

横浜市が借り上げた70部屋程の物件を管理している。施設によってはスタジオと居住スペースが一緒になっているところとスタジオだけの場合もある。アーティストのやりたいことや特性に合わせて配置している。特徴として、街中の一ヶ所に施設が固まっているのではなく、京急線の日の出町駅から黄金町駅までの間に施設が点在しており、国内外のアーティストが混在して活動している。展示はホワイトキューブのようなギャラリー空間「高架下スタジオサイト A ギャラリー」と「gallery made in Koganecho」の 2 つ、そして各スタジオ自体が展示会場にもなっている。

取材時は、「井戸端 At the Well」というタイトルでレジデンスプログラムの成果展を開催。ギャラリーを井戸に見立て、そこを中心に人々が話し、アイディア交換をする環境を設定し、レジデンス期間中の成果物だけでなく、その間の思考のようなものをギャラリーに集める試みをした。これまでもどのように成果までの途中を発信するかという課題があり、ブログやアーティストインタビュー、トークなど様々な挑戦をしてきた。

「井戸端 At the Well」https://www.koganecho.net/contents/event-exhibition/event-exhibition-2575.html

## 3）インタビュー

**— AIR に関わるスタッフの専門性についてどのようにお考えでしょうか**

**佐脇 三乃里（以下、佐脇）**：アーティストやアートのことをちゃんと理解することが前提として必要だと思います。

**— そのスキルの身につけ方は？**

**水谷朋代（以下、水谷）**：私は、首都大学東京大学院システムデザイン研究科インダストリアルアート学領域で、社会の中でのアートの役割を研究していました。在学当時からアートプロジェクトをアーティストと共に実施する授業があり、その流れでアートやアーティスト活動に関心を持ち、卒業と同時に黄金町エリアマネジメントセンターに入社しました。仕事の学び方としては放り込まれた感じですね。2008 年から始まったこの事業のこれまでは新しいことの連続だったと思います。プログラム的にも定まらない中で事業全体を探りながら進めてきました。現在 10 年目を迎えて、有効なプロジェクトや方法が見えてきているような気がします。これから新入社員が入社しますが、参照するものができつつあるのではないでしょうか。

**佐脇**：学生時代は建築を勉強しており、学問としてはアートを学んでいなかったですが、学生の時に研究活動の中でアーティストと共に活動することが多かったので、その流れでアートマネジメントに興味を持ちました。横浜が地元で、学生時代に横浜 市の創造都市事業の調査をしていました。入社当時、黄金町エリアマネジメントセンターでは、大きな企業のように新入社員に一から教えるということはなく、実践を通して覚えていく感じでした。場面ごとに上司から助言はありますが、決まったスタイルはないので、現場の中に飛び込んで覚えることの方が多かったです。例えば、黄金町バザールのアルバイトスタッフの運営マネジメントを任された 2011 年は、横浜トリエンナーレとの同時開催で、アルバイトスタッフを十数名雇うなど大規模でした。街の中での展覧会なので、日常的に様々なことが起き、報告を受けては対応していく日々でした。仕事をしながらルーティンとしてマネジメントしていくものができ、それに加えてその年々のイレギュラーなことが起こるため、あらかじめ教えられるものとそうでないものがあります。

**— 事業におけるスタッフの役割分担はどのようになっていますか？**

**水谷**：主に、アートマネジメント、まちづくり、広報・メディア、経理の 4 つに分かれています。 まちづくりの側面が強く、アーティストだけでなく地域の方とのイベントや、行政とのやり取りなど、全体の中で活動しているため、業務分担はしつつも重複しながら進めてきています。平成 31 年度からは、各部門にマネージャー をつけるなどの新体制を作ろうとしていますが、連携しながらでしか見えてこないものもあると思います。 年にもよりますが、インターンもいます。平成 30 年度は文化庁の助成を得てインターン in レジデンスを実施しました。国内外に公募を出し、応募者の中からフィリピンとベトナムより計 2 名を選定し、黄金町バザールの時期に合わせて滞在し、インターンと してアーティストサポートや、レジデンスプログラム運営の手伝いをしてもらいました。また、黄金町バザールの時は人が増えるため、コーディネーターを雇うことも多いです。

**— AIR 運営者としてのご自身のスキルはどのようなものとお考えですか？**

**佐脇・水谷**：それはわかりませんね。

**水谷**：AIR の集まり（研究会）の際、別の AIR 団体の人が「私たちは専門家である」という話をしていました。その時に「AIR の専門とは何か？」と思いました。そこから考えてみると、（AIR の場では）難題に対し、無理だと言ったら全てが終わってしまうので、代案を提示したり、また、アーティストごとにやりたいことも異なり、変化していくので、それに対応

しなくてはなりません。もしかしたらそれ自体がスキルなのかと、最近は思うようになりました。アートマネジメント部門のキュレーターとの動き方を比較すると、マネジメントはいかに滞在期間を豊かに耕していけるか、キュレーションはどう導くのかというように役割を分けることができる気がします。地域や企業、行政などとの交渉も多く、そこでの対応・柔軟性が問われます。それがスキルだとは思わないが、もしかしたらその幅の広さに対応することがスキルかもしれませんし、経験が重要だと思います。経験してきた中でのノウハウが、また次に使えるわけではありませんが、参照できるものになっている。みんな違うことを言うから、その都度知らないことが多いことに気づきます。

**佐脇**：1 つのことを伝えようとしても対行政、対アーティストとでは使う言葉が異なり、様々な経験を経て、それ（言葉や対応の使い分け）がスキルになっていると思います。

**— 今後 AIR を運営するにあたり、どのようなスキルをアップしたいでしょうか。欲しいスキルとは？**

**佐脇**：オランダでの調査で、アーティストの日常的な制作環境をどうマネジメントの中に位置付けられるかを考え、今も考え続けています。不動産のことや場所の運営の仕方、レジデンスの在り方も知っていく必要がある。継続性がないと意味がないので、そのためにはどうしたらいいか、建築的な思考と不動産・アートのマネジメントの接点や経営的なことも含め、そのスキルを身に付けたいと考えます。

**水谷**：対外的に活動する際、対等に議論ができるように、英語力をもう少し上げたい。また、今回チェコに行き、どういうシステムの中でアートを位置づけるかというのは、国や地域が違えば全く異なるので刺激になり、より知見を広げたいと思いました。美術館や芸術祭、大学と AIR の連携も可能性があると思います。つい現場に入ると現場脳で終わってしまうので、引いて組み立てる勉強はしたい。黄金町で言えば、アーティストがスタジオをどう獲得できるか、イギリスの Acme studio がロンドンの街中でアーティストのためのスタジオを確保しているというのを聞いて、その方法や社会にどう位置付けていくかという勉強をしたいですね。

**— AIR 運営を通じて、関わる前と関わった後でご自身の変化（意識、スキルなど）がありましたか？**

**佐脇**：AIR に関わる前は学生でした。

**水谷**：私もです。（運営に関わってからの）全てが基盤となっています。

**— 変化があった場合、それは何が要因であると考えますか？**

**水谷**：ここでいろんなアーティストに会ってきました。アーティストとの国を超えたネットワークはかなり広がりました。そこで様々な事情を知りました。自分の国で難しい背景を持つ海外アーティスト、日本で活動している若手アーティストの現状を知り、彼らにとって国内外での滞在制作や、発表の機会の重要性を感じることができました。 また、行政、地域、アーティストとのギャップを知ることにもなりました。常にいかに相手のことをわかりつつ、こちらのやりたいことを擦り合わせていくかを考え、その間のバランスや立場ごとに持つ論理は少しずつ理解したかもしれないです。

**佐脇**：立場の異なる人との信頼関係をどう作っていくかの大切さを学びました。黄金町はアジアの作家との関係性がとても強いので、同じアジアの違う国のことを知るということと、それによって自分の国のことを考え、見つめ直すことになったことはすごく大きな変化でした。事業主や地域の方など立場の異なる方との関わりの中で動いているという意味では、現在の仕事を運営するにあたってもこれまでの経験に通じているものがあると考えています。

**【略歴】**

**佐脇 三乃里（さわき・みのり）**

2011 年から 2017 年 10 月まで黄金町エリアマネジメントセンターに勤務。レジデンス作家の受け入れ窓口として滞在施設の準備や、黄金町バザールのアルバイトスタッフの運営、マネジメント等を経て、アシスタントディレクターを担当。平成 29 年度文化庁新進芸術家海外研修制度で 1 年間オランダに派遣されることを機に、退職。デン・ハーグを拠点にアーティストの制作環境の状況とそれを支えるための手法に関する調査を実施。帰国後は場所の運営に興味を持ち、2018 年より春蒔プロジェクト株式会社が運営する co-lab というシェアオフィスの運営に携わる。

（左）佐脇 三乃里氏 （右）水谷 朋代氏

**水谷 朋代（みずや・ともよ）**

2013 年から黄金町エリアマネジメントセンターに勤務。主に海外アーティストの対応。年間を通して、アートプロジェクトの企画運営や国際交流事業・レジデンスアーティストのサポートを担当。2018 年 7 月から約1ヶ月プルゼニ(チェコ)に滞在し、西ボヘミア大学で開催されたサマースクール「ArtCamp」に参加し、日本での ArtCamp 実施検討に関する調査を実施。2019 年 3 月末に退職予定。

## 2. PARADISE AIR

一般社団法人 PEAR
PARADISE AIR　松戸市本町 15-4　ハマトモビル 506 号
http://paradiseair.info

2013 年より松戸市においてスタート。1F にパチンコ店がある建物の 4 階、5 階の元ラブホテルの 16 室を占有し、AIR のための滞在スタジオ、事務局、共有で使用できるスペースを運営。そのユニークな背景に加え、アートの様々な分野でフリーランスのスペシャリストとして活動するメンバーによる運営されているという観点から、働き方にも着目した現地での概要調査とインタビューを実施した。

**インタビュイー｜**森純平（ディレクター/建築家）、庄子渉（プロデューサー/音楽家）
**聞き手・文責｜**菅野幸子、日沼禎子
（インタビュー実施日：2019 年 1 月 30 日）

### 1）事業概要

2010 年に、松戸市ではじめての地域アートプロジェクト「松戸アートラインプロジェクト」（主催：松戸アートラインプロジェクト実行委員会）が開始された。若手を中心とする現代美術作家を松戸に招聘し、アートが介在することによって様々な人や「事」や「もの」が行き交い、集積を生み出し、まちが変容していくことを地域が体験した。しかし、単発のイベントでは、後に何も残らないという体験から、松戸まちづくり協議会が発足し、2013 年、AIR を開始。AIR 事業創設者の森氏、庄子氏、中島氏の 3 名は、それぞれが海外 AIR で

の創作活動・運営を体験していたため、それぞれの経験知を集めてプロジェクトを始めた。その他、アートの様々な分野でフリーランスのスペシャリストとして活動をしているメンバー（通訳、会計士等）と、地元の人々、行政や民間企業の人々により組織され、メンバーそれぞれが AIR を自身の活動の一つとして位置づけ、フラットな関係性の中で運営を行なっている。

AIR 滞在アーティストによる松戸市内における制作風景

AIR プログラムは、ショート・ステイとロング・ステイの 2 種類で、前者はリサーチャーやキュレーターも受け入れ、後者は、3 ケ月にわたり受け入れ、フル・サポートしている。このほかラーン・プログラムを実施し、これらが活動の3つの柱となっている。招へいアーティストの選考は、メンバーに加え外部の専門家も交え、多様性とバランス（国、ジャンル）を選考基準としている。AIR（の運営規模）は今が丁度良いボリュームで、これ以上広げる必要はないと思っている。とは言え、自分たちもそれぞれの本業が忙しくなりつつあるので、次の世代にバトン・タッチしていくことも検討している。AIR の運営に関して、これまで特に困ったこと、問題があったとはあまり感じておらず、地元の方々とも関係性は良好。いろいろなチャンネルを通じてコミュニケーションを図ることを心掛けており、最初は、両者間での距離の取り方が難しかったが、現在ではアーティストの招へい費を寄付してくれるようになった。

現在の運営主体は一般社団法人 PAIR。現在メンバーは 13 名、役員 3 名。コアとして活動しているのは 5 名、雇用スタッフ 3 名で、給与は年俸制。（日常的な業務では）Google Drive、Messenger などを活用してメンバー相互にコミュニケーションをとり、週 1 回スタッフ・ミーティングを設けている。あえて専任スタッフを置かず、メンバーの専門性を活かした役割分担により運営。（常勤での）雇用が出来ないという事情もあるが、AIR だけに活動が閉じない、チームの流動性を広げ、広がりを作ることを優先している。

## 2）インタビュー

**— AIR を運営者としてのご自身のスキルはどのようなものとお考えでしょうか？**

**庄子渉（以下、庄子）**：PARADISE AIR の場合、アーティストや通訳、会計士など専門のスキルを活かしたスタッフからチームが構成されており、それぞれの専門分野を活かしてアーティストをホストしている。例えば、音楽家や作曲家であれば、庄子さんが担当し、イベントなども企画している。従って、他の AIR のようにマネジメント専門のスタッフがいるわけではない。各メンバーがすでに専門家としてのスキルを有していると思う。

**森純平（以下、森）**：むしろ、変化に柔軟に対応できるようスタッフの流動性を高めておきたい。

**— AIR 運営を通じて、関わる前と関わった後でご自身の変化（意識、スキルなど）がありましたか？**

**庄子**：AIR を始め、さまざまな表現技術、表現形態を知ることにより、アーティストとしての自分が大きな影響を受けた。また、国際的なネットワークや、海外のあちこちに友人も増え、世界中どこでも行けると思えるようになった。自分の専門分野以外のアートに対する理解が深まり、コラボもするようになった。

**森**：視野が広がり、大いに刺戟を受けた。例えば、八戸市が建設を計画している新美術館のコンペで提案したコンテンツは、テート・ラーニングを参考にしたが、これも滞在したアーティストから得た知識をもとにコンセプトを作り上げた。アーティストが継続して滞在していることにより、生の経験知を得ることができるし、議論も継続してできる。また、選択肢も増えたし、なによりも世界観が変わった。

**— 今後 AIR を運営するにあたり、どのようにスキルをアップしたいでしょうか？また、それらの専門性を高めるためには、具体的に何が（どのような経験、機会）必要とお考えでしょうか？**

**庄子**：アーティストとしての自分の専門性を高めること、自分の引き出しを広げることにより、滞在するアーティストへの理解や共感を深めることに通じると思う。

**森**：その集積が良い AIR を作り上げることにも通じていると思う。必要なことは、AIR 以外の様々な現場での実践、でしょうか。建築家として以外にも、舞台、美術の現場や、様々なプロジェクトのマネジメント、映画制作等色々関わっているのですが。コーディネーターの専門性ってすごく汎用性が高いと思われます。

**庄子**: 専門性を高めることについては、自分たち自身が他の AIR に滞在するというのも有効かなと思います、僕でいうと音楽家として他に滞在するとか。アーティストとして世界をもっと見てみたいので、チャンスがあれば海外の AIR に参加したいと思っている

**森**: Air 業界でサイクルが閉じない方がいいかなーと僕は思いますが、単純に海外の AIR に派遣が一番良さそうですね。得るもの多いと思います。そして、その後の報告会を合同でするくらいで現場の雰囲気はだいぶかわるかと思います。あとはほかの業界の人にアーティストへの伴走の仕方をおしえるとか。

**庄子**: コーディネータ研修制度があるとすれば、その人の専門性とか性格とかによって、いろんなコーディネートのやり方があり得ると思うので、ひとりの人が画一的にコーディネートはこう！と教えるというより、いろいろなパターンを学べるといい気がします僕はもともと音楽系なのでパラダイス AIR でも他の人のコーディネートのやり方を見ていて毎回勉強になります。

**森**: 国内外、地方都心、音楽、美術、etc と（パラダイス AIR は）雑多な分野にわたっていますが。（研修に行くのならば）どの業界が良いとか、同系統の分野が良いとかは特に無くて、なるべく予想外の分野の現場にいくのが 1 番いいかなと思います。例えば、初めて（舞台の）上手と下手が国によって違うのを聞いた時、だいぶ驚いたのですが、当たり前にしていることこそ、業界や、経験値で根本的に思想が違う。ですから、いろいろあるんだ、ということが相対化さえできれば（分野は）何でも良いと思います。

**—　他にほしいスキルを持っている人はどのような人材でしょうか？**

**森**: プログラマー、編集者、アーキビストなど記録を編集してくれるスタッフ。

**—　AIR で重要なことは**

**森**: 楽しむこと。

**庄子**: アーティストを信じること。信頼感。

**【略歴】**

**森純平｜もり・じゅんぺい**

1985 年マレーシア生まれ。2011 年東京藝術大学大学院建築科卒業。在学時より建築から時間を考え続け、舞台美術、展覧会、まちづくり等、状況を生み出す現場に身を置きつづける。主な活動に alice(ナントビエンナーレ)、おっとり舎の企画運営(2006-北千住)、ドリフターズサマースクール講師（2013 横浜）遠野オフキャンパス（2015-）、東京藝術大学特任助教。

**庄子渉｜しょうじ・わたる**

音楽家、アートコーディネーター/プロデューサー。1987 年、仙台市出身。2010 年、東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科卒業。専門はコンピュータ音楽/インプロヴィゼーション。在学中、音楽家や建築家とともに古民家を改装したアートスペース「おっとり舎」を立ち上げ、国内外のアーティストを迎えて様々な公演や展示の企画、制作を行う。2013 年より、アーティスト・イン・レジデンス「PARADISE AIR」を立ち上げ、アーティストや行政、住民と協働しながら、地域資源を活かした創造的なまちづくり「暮らしの芸術都市」に取り組んでいる。

## 3. UBE ビエンナーレ アーティスト・イン・レジデンスプログラム

UBE ビエンナーレ事務局（宇部市　観光・シティプロモーション推進部　UBE ビエンナーレ推進課）
〒755-0001　山口県宇部市大字沖宇部 254 番地　ときわ湖水ホール
https://ubebiennale.com/

豊福　亮《UBE ラビリンス》 中山間地域に設置した屋外インスタレーション＋ワークショップ型作品

山口県宇部市で 2 年に 1 度開催されている野外彫刻展の UBE ビエンナーレ（現代日本彫刻展）は、国内で最も歴史のある野外彫刻の国際コンペティション。戦後の復興期に直面した公害問題克服のため、産・官・学・民が協力して取り組んだ「緑化運動」・「花いっぱい運動」とともに、1961 年に宇部市ではじまった市民運動「まちを彫刻で飾る運動」をその原点として受け継いでいる。2018 年度、新たにアーティスト・イン・レジデンス部門が新設され、アーティストによる滞在制作と成果発表、市民との多様な交流の場が設けられた。AIR を専門的に行う組織ではないが、芸術祭から派生した新たな展開である点に着目し、AIR を介して芸術と社会との接点を拡張することと、そこで必要な人材育成について掘り下げるための事例として取り上げている。
（**文責｜**日沼禎子）

### 1）事業概要

UBEビエンナーレの新部門として位置付け、アーティストが市内に滞在し、地域と関わりながら作品を制作する3つのAIR（アーティスト・イン・レジデンス）プログラムを実施。滞在制作拠点となったのは、ときわ公園、中心市街地、中山間地域の3エリア。2018年9月～11月にかけて、それぞれの地域にアーティストが滞在し、作品を制作・公開。運営側と市民との協働の場を生み出し、新たな観客・参加層を掘り起こす試みとして実施した。

**室内インスタレーション＋ワークショップ型（こどもビエンナーレ）**

アーティスト／Elena Redaelli（エレナ・レダエリ／ノルウェー）
作　品　名／PARTICIPATORY TEXTILE―NORI MONOGATARI／みんなの織物
滞在・制作期間／10 月　参加者数／146 名
制作・展示場所／ときわ湖水ホール　アートギャラリー（ときわ公園内）

すぐ近くにある港のこと、そこで行われているノリ養殖のこと、働く漁師さんたちのこと、アーティストのリサーチから見えてきた「宇部の物語」を通して、子供たちが地域の歴史や資源について学び、身近にある素材を用いテキスタイルの様々な技法を使って、海をイメージしたインスタレーション作品「NORI MONOGATARI」を共同制作。素材には海苔養殖に使われていた漁網や子供たちから集めた古着、中山間地域の竹を用い、完成した作品は、ときわ湖水ホールアートギャラリーでの展示を行ない、夜間のライトアップを行なった。

## プロジェクト型（中心市街地）

**アーティスト／葛谷春光堂（くずやしゅんこうどう）**
**作品名／日常劇場 All the world's a stage**
**滞在・制作期間／10 月～11 月　参加人数／190 名（のべ 966 名）**
**制作・展示場所／宇部市中央町三丁目 10 番 11 号、宇部中央銀天街**

炭鉱都市として発展した歴史を持つまちの商店街「宇部中央銀天街」の思い出に関するインタビューをもとに、商店街各所に様々な年代の人と時代の記憶が混在し結ばれるように組み立てられた市街劇を制作・上演。商店街の再開発エリアに隣接する2階建て住宅を制作拠点に、オープンスペースとなっている1階駐車場を開放し、日曜日毎のワークショップや懇親会などの実施を通じ、中心市街地での新しい場の構築を目指した。
※上演の様子は UBE ビエンナーレ公式サイト（ubebiennale.com）から動画などを紹介。

## 屋外インスタレーション＋ワークショップ型（中山間地域）

**アーティスト／豊福 亮（とよふく りょう）**
**作　品　名／UBE ラビリンス**（アクトビレッジおの　〒7541-1311 宇部市大字小野字大日原 7025 番地）
**滞在・制作期間／9 月～10 月　参加人数／525 名**
**制作・展示場所／旧吉部小学校、旧小野中学校、アクトビレッジおの**

宇部市北部、小野湖のほとりにあるアクトビレッジおのの中心にあった花壇スペースを改修し、500 名を超える市内の子供たちと一緒に制作した巨大迷路を制作。壁面は子供たちが自由に描いたカラフルな絵や模様で埋め尽くされ、迷路の中には物見やぐらや、イベントで使用できる屋根のあるスペースや広場などがあり、設置後も持続的に利用できるように運営を行なっている。

（左上）エレナ・レダエリ《PARTICIPATORY TEXTILE―NORI MONOGATARI／みんなの織物》。室内インスタレーション＋ワークショップ型作品
（右上）エレナ・レダエリによるこどもワークショップ。　（左下）葛谷春光堂《日常劇場》。市街地におけるパフォーマンス
（右下）葛谷春光堂《日常劇場》上演の様子

## 2）インタビュー

**インタビュイー｜**山本容資（ときわミュージアム　学芸員）、日沼禎子（ときわミュージアム　アートディレクター）
**聞き手・文責｜**大澤寅雄
（インタビュー実施日：2019 年 3 月 16 日）

**―　UBE ビエンナーレの特徴を教えてください。**

**山本容資さん（以下、山本）**：宇部市は文字通り「彫刻のまち」で、美術館があるわけではなく、野外に 200 点の彫刻があって、市民にとっては好きか嫌いかに関わらず「彫刻のまち」という認識があるんですよ。それはとても特殊なことだと思います。宇部で野外彫刻展がはじまったのは、行政が始めたというよりも、公害問題や青少年の非行といった社会問題を背景に、市民自らが「自分たちのまちに彫刻を置きたい」という文化に対する強い欲求から始まったんです。その相談を宇部市から受けた美術評論家の土方定一が当時はまだ日本にはなかった野外彫刻展を企画して、2 年に 1 回の芸術祭に向けて彫刻家が作品を制作するという仕組みを作りました。彫刻展で上位入賞した作品は宇部市が買上げ、市内の各所に設置しています。宇部市は文字通り「彫刻のまち」で、美術館があるわけではなく、野外に 200 点の彫刻があって、市民にとっては好きか嫌いかに関わらず「彫刻のまち」という認識があるんですよ。それはとても特殊なことだと思います。

UBE ビエンナーレの「アーティスト イン レジデンス プログラム」は今年から新たな部門としてスタートし、市内の3エリア（ときわ公園、中心市街地、中山間地域）で実施しました。

**―　AIR に関わるスタッフの専門性というのはどんな風にお考えになっているでしょうか。**

**山本**　過去の UBE ビエンナーレの経験の中でも彫刻家が滞在してリサーチや作品の制作もやったことがありましたし、ビエンナーレを活用して学校に芸術家が入って授業をしてきた蓄積がありました。今までビエンナーレでやってきたことが AIR に役に立ったと言っていいかどうかわかりませんし、それがスタッフの専門性と言っていいかよくわかりませんが、AIR 以前にアーティストが地域に入る下準備が重要だとは思っています。

例えば、作家が地域についてリサーチをしたいと言ったときに、まったく知られていない作家を誰に紹介するのか、インタビューに応じてくれたり、素材を提供してくれたりしてくれるような人を探すにしても、誰を頼ればいいか、飛び入りで行っても全然うまくいかないでしょう。単に美術展を開いてお客様に見に来てもらうだけではなくて、その地域の人たちが自主的に「私たちはこういうことがしたい」とか「こういうことやってみたい」という情報を集めておく人が必要だと思います。

**日沼禎子（以下、日沼）**：AIR プログラムを提案して、現場で実施してくださったのはスタッフの方たちなんですけど、初めてなのにものすごくスムーズだったんですよ。運営主体が行政であることの一つの利点に、市の横のネットワークがしっかりしていることが挙げられます。以前のビエンナーレ事務局だった方が、今は中山間地域の行政の担当者になっていたり、異動があってもビエンナーレの経験を持っている事務方が地域の声を集められるようになっていて、そこがとてもうまくリンクしていて驚くほどスムーズな連携でやっています。

**―　ここまでの話でのスタッフの専門性は「コーディネーター的な役割」ということが言えると思うんですが、コーディネーター以外に求められる専門性としては何かありますか？**

**山本**　最終的に作品として発表することが前提であれば、作品としてのクオリティを意識して見ている人が必要じゃないかと思います。それは地域の人と作家をつなげるのとはまったく別の視点で、展示室で作品を公開するにしてもパフォーマンスとして見せるにしても、コーディネーターとはまた別の専門性がいると思います。

例えば今回の中山間地域の AIR では、北部地域のコーディネーター的な役割をしてくれた市の職員がいて、その人が作家と学校や地域の人たちをつなげてくれたんですけど、それと並行して、どのように最終的な形で展示をするのか、構造面や安全面の最終的な完成形を意識して作家にアドバイスできるような人が必要でした。

**日沼**　そのあたりの役割を山本さんが中山間地域では担当していたわけですね。

**山本**　そうです。ですから私は今回の AIR プログラムではコーディネーター的な役割ではなかったですね。もちろん、学校に行って作家がワークショップをするときは一緒に行って子どもたちに話をしたりするんですけど、それはまた別で、どういうスケジュールで、どのように作品を組み上げていくか、基本的な進行管理を意識していました。

**— コーディネーター的な役割と、キュレーター的な役割とは立ち位置や関わり方が違うと思いますが、山本さん自身のスキルはキュレーター的な役割と言っていいですか？**

**山本** キュレーター的な役割とコーディネーター的な役割は、僕の中ではちょっと別の方がいいと思っていて、作品の最終的な形や管理面のアドバイスと、コーディネーター的なアドバイスでは多分違っていて、同一人物が両面から言うと「言っていることが違う」感じになる気がします。今回の中山間地域での AIR については、イベントや学校での授業のやり方はコーディネーター的な役割の方にお任せをして、実際に作品を作る際の、例えば柱を建てるときに地面にどれぐらいの深さに埋め込むとか、そういう計算という仕事は、私ができるだけ口を挟む。そのことでうまくいったと思います。

**日沼** 山本さんの場合はインストーラーのような専門性もあって、特殊なんですよね。ちなみに、山本さん以外に 2 人が UBE ビエンナーレの専門スタッフをしていて、広報、教育普及、企画展などを手分けしながら進めています。

**山本** 今回の AIR については、私は無事に作品を設置して展示公開をすることに注力しましたが、本当は地域の人々と作品を直接つなげていく役割がしたいと思っています。

私はもともと岡山の高校で美術の教員をやっていたんです。2008 年に宇部に来たんですけど、やっぱり彫刻展を開催して見せるだけではなくて、学校の中で授業として彫刻を扱うようになってほしいと思ったことから、2010 年頃から教育委員会と掛けあって 2012 年頃から授業をさせてもらうようになったんです。

**— 今後も AIR プログラムを続けるにあたって、どんなスキルアップをしたいですか。**

**山本** 私自身が学校の中に入って授業をするといった方向に目線が行っているので、実際、AIR がどのように行われていて、どういうものなのかが自分の中でまだモヤモヤしているんです。今回、市内での AIR も3つそれぞれでまったく違うことをやったんですが、宇部で AIR をやるということがどういう意味を持っているのかも、まだわからないという感じで、スキルアップというよりは、私も含めて、宇部での AIR の目的をもう少しはっきりと持ちたいと思っています。

半世紀の実績のある野外彫刻展で、彫刻家も入選した作家だけで 400 名を超えていて、運営委員や審査委員はある種の系譜のようになっているんです。そういう人たちの半世紀以上の積み重ねがあって今があるので、その野外彫刻のまちである宇部が AIR をやることの目的意識というか、AIR をやったことで何を実現したいのか、もう少し明確にしたいと思っています。例えば「アートと地域」と言ったときの「地域」とは何かと言うと、私自身にとっては教育現場かもしれないし、その中でも幼稚園なのか小学校なのか中学校なのか、それをやることでどうなることを目指すのかを明確にしたい。

私は彫刻教育というのを 7 年間やってきたのですが、実際、学校の中に作家が入って授業ができたのは 3 年目ぐらいからです。まず 1 年目はとにかく学校の先生と話をすることが目的で、学校の先生と信頼関係をつくり、2 年目はその学校の先生が何をやりたいのかを把握して、3 年目に作家がマッチングできて中に入れた。例えばそれが 1 年目に、いきなり作家を学校に入れて授業をしても、間をつなぐ私のことを先生が知らないと、うまくいかないと思うんですよね。そういう受け入れ体制を作っていくっていうのが必要なんだろうなと思いました。

そもそも AIR は作家のためのものだとは思うんです。何ヶ月か自分の知らない場所に滞在して缶詰になって作品が作れるという機会を得たり、いろんな人と出会う。ただ、レジデンスが行政主体でやっていることもあって、作家のためというよりは「まちおこしのため」という考え方があります。ただ、まちのためにアーティストを活用するということが本当にいいのか悪いのか、そのモヤモヤしたことを整理したいなと思っています。

豊福亮《UBE ラビリンス》の制作プロセスにはたくさんの地域のこどもたちが参加した

**— 山本さん自身は、UBE ビエンナーレと AIR プログラムを経験する前と、経験したあとでは、どんな変化がありましたか。**

**山本** 彫刻を取り入れた授業をはじめた頃、先生に何がしたいか尋ねたのですが、先生たちは「本物が見たい」子供たちに「本物を見せたい」と言います。実際の作品を見て授業がしたいし、作家本人に会うだけでも子供たちにとっていい。私も、学校の中で授業として彫刻を取り入れることは、本当に教育的な役割があると思っていて、例えば、算数や国語といった答えや評価がはっきりしている教科でうまく成果が出せない時に彫刻の授業であれば、その子供なりの表現や技術を引き出してあげて、基礎教科とは違う、別の視点で評価してあげることができる。それはすごく重要なことだなぁと思うようになりました。今は忙しくなって彫刻教育に手間を掛けにくくなっているんですけども、AIR をやって、子どもたちが作家と会った時の雰囲気を見ていると、やっぱりその大切さを再確認しました。でも、作品や作家を「活用する」ということはどういうことなのか、よく考えなければいけないと思っています。彫刻の街として、どういう発信をするべきなのか、まちづくりとして、教育普及として、作家に対してはどうなのか。それぞれに趣旨や目的があって、それが良いことなのか悪いことなのか、今すぐにはわからない。今回の AIR を経験する前と後でなにが変わったかと聞かれれば、いろいろやってみてよかったけれども、何のためにそれをやるのか考えるようになった、ということでしょうか。今回の AIR は、「今までやってきた蓄積があったからうまくいった」ことが実感できたので、AIR によって新しくスキルが加わったというよりは、それまでの UBE ビエンナーレでやってきたことが間違っていなかった、という認識を持ちました。ただ、今までやってきたことの手応えはあるけれども、それが何なのかが、正直なところ、まだ自分たちもよくわかっていないんです。

半世紀以上続いた彫刻展で育った作家も、ここで生まれた表現もあったので、AIR も、作家のためのレジデンスを半世紀くらいやれば、展覧会の来訪者数やインバウンドとは関係なく、思いもしなかった表現が生まれることになるのかもしれません。野外彫刻展にしても 40 年間くらいは観客を増やす努力をあまりしてこなかったんですが、それでも国内の野外彫刻展の発展に寄与してきたと思います。そういう歴史の上にあることを考えたときに、AIR が一過性のイベントではなくこれからも続けていく事業であれば、しっかりとした考え方を持っていないといけないと思っています。宇部市のもつ膨大な彫刻のコレクションや、これまでの歴史や先人たちの思いを市民に還元していく。それが僕にとっての彫刻教育につながっていて、この先の AIR で何ができるかを考えていきたいと思っています。

**【略歴】**

**山本　容資｜やまもと・ようすけ**

高知県出身。岡山大学大学院教育学研究科美術学科卒業。美術教師を経て、2008 年より、宇部市緑と花と彫刻の博物館「ときわミュージアム」学芸員。2009 年より UBE ビエンナーレ（現代日本彫刻展）を担当。現代彫刻をテーマとした展覧会の企画、宇部市の野外彫刻を活用した独自の彫刻教育の開発や普及事業、その他宇部市が推進する彫刻のあるまちづくり事業に関わる。

# AIR 研究会、フォーラム報告（2018 年度実施）

1.　2018 アーティスト・イン・レジデンス　研究会＆トークショー
　　－「アーティスト・イン・レジデンスを考えてみませんか。」

2.　黄金町バザール 2018　インターン・イン・レジデンス成果報告会

3.　黄金町アーティスト・イン・レジデンスの事例：これまでとこれから

4.　研修報告会〈オランダ・チェコ編〉
　　－ オランダのアーティストのスタジオ獲得方法と西ボヘミア大学のアートキャンプの実践－

5.　AIR シンポジウム＆研究会

2018 年度に国内で実施された AIR に関する研究会、フォーラム等において、
AIR ネットワークジャパンが開催協力した事業から概要を抜粋した。

## 1. 2018 アーティスト・イン・レジデンス　研究会＆トークショー
## 「アーティスト・イン・レジデンスについて考えてみませんか。」（主催：滋賀県陶芸の森）

2017年より「多彩な技術と産地におけるAIRの役割、可能性」をテーマに、伝統的工芸品の産地にあるレジデンス事業に関わる各館が連携した研究会およびトークショーが実施されており、実施内容への助言、コーディネート、モデレーターを務めた。

**第1回研究会（東京）**

**日時｜**2018年9月23日（日）～24日（月・祝）＊2日間
**場所｜**女子美術大学杉並キャンパス 〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
**モデレーター｜**菅野幸子（AIR Lab　アーツ・プランナー／リサーチャー）、日沼禎子（女子美術大学教授、AIRネットワークジャパン事務局）

**＜AIR研究会＞** 2018年9月23日（日）　13:00 - 17:00

**各レジデンスの近況報告**

・滋賀県立陶芸の森
・益子国際工芸交流館／益子陶芸美術館
・瀬戸市新世紀工芸館
・京都芸術センター

**大学教育の現場から**

・工芸学科工芸専攻における教育｜吉田潤一郎（女子美術大学　工芸専攻　教授）
・AIRと美術大学との実験的取り組み＜Y-AIR＞について｜辻真木子（遊工房アートスペース）

**＜トークショー＞**

**多彩な技術と産地におけるAIRの役割、可能性-ローカルからグローバルに**

2018年9月24日（月・祝）13:00 - 16:00

・「海外でのレジデンス経験」　伊藤準（陶芸家、瀬戸）
・「ヨーロピアン・セラミック・ワークセンター（EKWC）でのレジデンス」西條茜（陶芸家・美術家、京都）
・「益子焼の伝統的な技術、若手陶芸家の育成についてAIRへの期待」床井崇一（益子焼伝統工芸士会会長、益子）
・「私のレジデンス体験　― アジアからアメリカ、ヨーロッパへ」村田彩（陶芸家、信楽）

第2回研究会（信楽）

＜AIR研究会＞　2018年12月11日（火）　13:00 - 17:00
**「レジデンスの運営マニュアルの策定」と「レジデンスの評価基準」**
**モデレーター｜**　菅野幸子（AIR Lab　アーツ・プランナー／リサーチャー）日沼禎子（女子美術大学教授）
**参加団体｜**　滋賀県陶芸の森、益子国際工芸交流館 / 益子陶芸美術館、瀬戸市新世紀工芸館、京都芸術センター
**オブザーバー｜**　奈良県文化振興課

＜トークショー＞　2018年12月12日（水）13:00 - 15:00
**「レジデンスの成果と評価を考える」** 吉本光宏（ニッセイ基礎研究所研究理事）
**「レジデンスと地域振興の視点から」** 山出淳也（BEPPU PROJECT　代表理事／アーティスト）

## 2. 黄金町バザール 2018 インターン・イン・レジデンス成果報告会（主催：黄金町エリアマネジメントセンター）

黄金町エリアマネジメントセンターは、2018 年度の取り組みとして、AIR を担う人材育成を目的としたプログラム「インターン・イン・レジデンス」および、当該事業の担当者の海外研修報告会を実施しており、本研究の対象として現地での取材を行なった。

**日 時｜**2018 年 10 月 25 日（木）
**場 所｜**黄金町エリアマネジメントセンター高架下スタジオ Site D
**報告者｜**Gabrielle Gatchelian / ガブリエル・ガチェリアン（フィリピン）／Thao D. Linh/タオ D.リン（ベトナム）
**コメンテーター｜**山野真吾 （黄金町バザール 2018 ディレクター、黄金町エリアマネジメントセンター事務局長）／水谷朋代 （黄金町バザール 2018 キュレトリアルチーム）／内海潤也 （黄金町バザール 2018 キュレトリアルチーム）

［**取材・文責｜**菅野幸子］

### 1. 報告会概要

文化庁の助成により、AIR を担う人材育成を目的とした「インターン・イン・レジデンス・プログラム」を実施。黄金町バザールにおける AIR プログラムにおけるインターンを公募。国内外（から 16 件（内、国内 2 件）の応募があり、当初は海外・国内各 1 名と考えていたが、アジア地域のアーティスト・ランスペースから 2 名を選抜。国内からは想定したより応募者が少なく、3 カ月の研修期間という条件が合わなかったのではないか。募集にあたっては国際交流基金を通して周知し、特に東南アジアからの応募が多数を占め、AIR に携わったことのある経験者、黄金町の AIR の手法を知りたいという希望者が多く、中には AIR が初めてという人もおり、事務局としてどのように人選するか悩んだが、海外からのアーティストの受入れ、滞在制作のアシストをするという一連のプロセスを学んでもらうこと、外部講師からのレクチャーを受けることが主要プログラムであったことから、AIR への取り組みが初めての人を 2 名選考した。

ガチさん(Gatchelian)は、マニラ出身。彫刻を専攻しており、98B でインターンとして働いた経験があり、帰国後は、そこに勤務することになっている。リン（Linh）さんはベトナムからで、医療関係の仕事をしており、アートの勉強をしたことはないが、アートに関心があり、仕事を辞めて、転身の第1歩としてこのプログラムに参加。二人は、8 月初旬から 10 月 28 日まで 3 ケ月間滞在し、関心のあるアーティストの制作のアシストを行った。今回の経験を通じた、今後の方向性、取り組みたいことを中心に報告した。

### 2. Gabrielle Gatchelian からの報告「World, Big World」

コミュニティでの活動に関心があり、特に、黄金町バザールの活動については以前から関心を持っていた。一般の人々とアートの間にはギャップがあるように感じられるため、自分としては、このギャップをどう埋めることができるかに関心がある。また、それぞれの人々が持っている「ストーリー」に関心がある。

アーティスト・イン・レジデンスというプログラムは、短期間で外国人が滞在制作をするという興味深い事例。日ノ出町駅の近くにカフェができ、そこに集まる人々にも物語があり、何かが起こっている。普通の人々がおこす効果というものがある。黄金町は、8 年前は危険な地域だったが、今では子供たちが遊びまわるコミュニティになっている。
マニラに帰国後はコミュニティにコネクションを作り、アートとコミュニティのギャップを橋渡しする活動を行いたいと考えており、まずはリサーチすることから始めたい。

## 3. Thao D. Linh からの報告

これまでアートとは関係ない仕事についていたが、今回の公募を知り、自分のキャリアを変えるチャンスになると思い、応募した。インターンも初めての経験だったので、始めは何をしたらよいのかわからなかった。3 ケ月前はまったく知らなかったが、現在は大分理解ができると思うので、ベトナムに帰国後、さっそく AIR を始めたいと思っている。ベトナムのアートは、ほとんどが伝統的な芸術で、コンテンポラリー・アートはほとんど存在していない。アートは遠い存在で、アーティストや教育機関も少なく、美術館もほとんど機能していない。しかし、人々は、関心をもっていてアートを欲していると思うので、変えていく必要性があると思うし、そうすれば、学生にももっとチャンスがあるはずと考えている。（ベトナムで運営していくための）課題は、二つあって、一つはファンドレイジング、二つ目は、検閲があるという問題。ベトナムでは公的助成がないため、海外から受けるしかなく、AIR のネットワークもこれから作っていかなければならない。そして、人が（1箇所に）集まっていると警察がやってくる。サステナビリティも課題だが、まずは自国で助成を受けられる欧米のアーティストたちをターゲットにするつもりである。黄金町では、さまざまな人に会う事が出来た。また、戻ってきたいと思っている。

## 4. フィードバック｜インターンにおいて難しかった点

・アーティストと一緒に生活すること。いい人だったけど、アーティストの生活スタイルと合わない
・言葉の壁

（左）ガブリエル・ガチャリアン。インスタント・コーヒーとの打合せの様子　（右）ディン・タオ・リンによる 98B でのプレゼンテーションの様子

**【略歴】**

### ディン・タオ・リン（ベトナム、ハノイ）｜Thao D. Linh

Foreign Trade University of Vietnam にて経済学・経営学を学び、現代アートに関してはあまり経験と知識は持っていなかったが、今回のインターンシップを経て、帰国後、ハノイにてアーティスト・イン・レジデンス Ba-Bau AIR を始める。黄金町バザール 2018 参加アーティストのエスクリ（ジェット・イラガン）を招聘し、サウンド・アーティストを中心としたイベントを開催。今回のインターンの成果を 2019 年 1 月 10 日（木）に 98B Collaboratory（フィリピン、マニラ）にて発表。

### ガブリエル・ガチャリアン（フィリピン、マニラ）｜Gabrielle Gatchelian

University of the Philippines Diliman 在籍。黄金町エリアマネジメントセンターと交流のある 98B Collaboratory にてインターンを経験。今回のインターンシップを経て、98B Collaboratory の中心メンバーとして活動を始める。今回のインターンの成果を 2019 年 1 月 26 日（土）に 98B Collaboratory にて発表。

**黄金町バザール 2018 人材育成プログラム**

**「AIR マネージャー・インターン・イン・レジデンス」**

**募集要項**

本プログラムは、NPO 法人黄金町エリアマネジメントセンターが約 10 年にわたり培ってきたアーティスト・イン・レジデンス(以下 AIR)事業の実績とノウハウを生かし、将来の AIR 事業を担う人材育成の場を提供する短期集中型のインターンシップです。研修者はこの黄金町エリアで一定期間滞在しながら、実践を通して AIR 事業の手法を学ぶことができます。

本プログラムが実施される「黄金町バザール」の時期には、日頃から黄金町を拠点に活動する約 50 組のアーティストに加えて、本展参加のため国内外から招へいされたアーティストたちが、まちなかに点在するスタジオで滞在制作を行います。アーティスト同士、また地域コミュニティとの活発な交流は、「黄金町バザール」および黄金町 AIR 事業の大きな特徴といえるでしょう。

このような現場での出会いに積極的な姿勢で取り組むことができる、意欲あるインターンを募集します。

**1. 研修内容**

(1) AIR 事業運営補助

(2) アーティスト滞在制作補助

(3) 企画運営補助

＊ 会期中に 2 回、外部講師を招いたレクチャー、ディスカッションを行います。

＊ 研修成果を「黄金町バザール 2018」の会期中に発表します。

**2. 研修期間（レジデンス）**

2018 年 8 月 1 日～10 月 31 日

＊ 最短 30 日間～最長 90 日間。

＊ 具体的なレジデンス期間は選考後、担当者と調整の上決定します。

**3. 募集人数**

2 名（国内 1 名、海外 1 名）

**4. 対象**

(1)AIR 事業を始めたい個人または団体の代表者

(2)AIR 事業を始めたい自治体職員

(3)AIR 事業に関心のある学生

(4)海外で AIR 事業をスタートし、黄金町あるいは日本と関係づくりを希望する個人または団体の代表者

＊ 年齢制限はありません。

**5. 応募条件**

・原則、黄金町エリアでのレジデンスが可能なこと

・日常会話程度の英語能力を有すること

**6. 待遇**

・　黄金町エリアマネジメントセンターが管理するレジデンス施設の提供（無料）

・　滞在費の支給（上限 20 万円）

＊　滞在費の支給額は、レジデンス期間に応じて審査後決定します。

＊　入居時と退去時の交通費のみ事務局が負担します。

**7. 勤務地、レジデンス施設**

勤務地：黄金町エリアマネジメントセンター（神奈川県横浜市中区日ノ出町 2-158）、ほか横浜市内各所

レジデンス施設：黄金町エリアマネジメントセンター管理施設

**8. 応募方法**

当方が用意する申請書に記入し、koganechobazaar2018@gmail.com までメールにてご応募ください。

件名を「AIR マネージャー・インターンシップ応募」としてください。

申請書はウェブサイト（http://www.koganecho.net/contents/news/news-2377.html）からダウンロードできます。

**9. 募集締切**

2018 年6月22日（金）19:00

**10. 選考方法とスケジュール**

書類審査の上、選考通過者と面接を行い決定します。

選考結果はメールにて通知いたします。

6 月 23 日(土)　書類選考結果通知

6 月 27 日(水)　面接　*スカイプ面接可

6 月 30 日(土)　最終選考結果通知

**11. お問い合わせ**

黄金町エリアマネジメントセンター　インターンシップ担当
TEL：045-261-5467　Mail：koganechobazaar2018@gmail.com
〒231-0066　神奈川県横浜市中区日ノ出町 2-158
http://www.koganecho.net

## 3. 黄金町アーティスト・イン・レジデンスの事例：これまでとこれから
（主催：黄金町エリアマネジメントセンター）

これまでの黄金町AIR事業をアート、まちづくり、広報の視点から振り返り、これからの10年に向けてどのような課題があり、何をするべきなのか、参加者との情報共有や議論を行なった。

**日時｜**2018年12月23日（日）14:00～16:00　＊参加無料
**会場｜**高架下スタジオSite-D 集会場（横浜市中区黄金町1-2番地先）
**主催｜**AIRネットワークジャパン
**共催｜**NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター

＜内容＞
はじめに｜黄金町AIRの概要
Session1｜まちづくり（リノベーション、行政との関わり）
Session2｜アート（アーティスト支援、まちでの可能性）
Session3｜広報（AIRを誰に・どのように伝えるのか）
Discussion｜これからのAIRに必要なスキルとは何か

＜発表者＞
木村勇樹（黄金町エリアマネジメントセンターまちづくりチーム）
水谷朋代（黄金町エリアマネジメントセンターキュレトリアルチーム）
立石沙織（黄金町エリアマネジメントセンター広報）

＜モデレーター＞
日沼禎子（女子美術大学教授/ AIR ネットワークジャパン事務局）

## 4. 研修報告会〈オランダ・チェコ編〉 －
## オランダのアーティストのスタジオ獲得方法と西ボヘミア大学のアートキャンプの実践－
## （主催：黄金町エリアマネジメントセンター）

黄金町エリアマネジメントセンタースタッフによる海外でのリサーチ経験、成果について共有する報告会が実施された。アートの現場を支える人材の視点から、2つの事例について紹介された。

**日　時｜**　2019 年 3 月 17 日(日) 15:00-17:00
**会　場｜**　黄金町エリアマネジメントセンター（高架下スタジオ）
**登壇者｜**　佐脇三乃里（黄金町エリアマネジメントセンター 2017 年退社、現在アート・コーディネーター）
　　水谷朋代（黄金町エリアマネジメントセンター・キュレトリアルチーム）

[取材・文責｜辻真木子]

### 1. 報告会概要

#### (1)オランダ編：佐脇三乃里

平成 29 年度文化庁新進芸術家海外研修制度により 2017 年 11 月から約 1 年間オランダのデン・ハーグ市に滞在した佐脇三乃里による、アーティストの活動拠点となるスタジオの獲得方法、その実践と歴史的背景を紹介。

#### (2)チェコ・プルゼニ編：水谷朋代

遊工房アートスペースと女子美術大学が取り組む国際交流事業の一環として 2018 年 7 月から約1ヶ月プルゼニに滞在した水谷朋代が、チェコ最大のサマースクールとして西ボヘミア大学で 2005 年から実施している「ArtCamp2018」での体験を紹介。プログラムの試みを報告するとともに、横浜・黄金町で実施する場合の可能性について報告。

## 2. 活動概要

### (1)佐脇 三乃里の活動概要

① 渡航先｜デン・ハーグ(オランダ)

② 滞在目的｜アーティストの制作環境の状況とそれを支えるための手法に関する調査を実施。

③ 滞在期間｜2017 年 11 月から約 1 年間

④ 背景｜黄金町で 6 年半勤めていく中で、アーティストの日常的な制作環境をどのように持続可能な環境をマネジメントとしてサポートできるかという課題を持った。

⑤ 調査内容｜平成 29 年度文化庁新進芸術家海外研修制度 1 年派遣員として、オランダでアーティストにとって有効的かつ持続的な活動環境を創出していくためのマネジメントの方法論や実践を探るというテーマを持ち、受け入れ先である「ANNA Vastgoed & Cultuur(訳=ANNA 不動産＆藝術)」でのインターン、及びアーティストのスタジオや団体組織への訪問を通して、アーティストの創作環境を調査した。

⑥ 受入先｜ANNA Vastgoed & Cultuur

2008 年設立。アンチスクウォッド(建物の所有者の権利を尊重しながら一時的に空き物件を管理し、低い賃料でその場所を貸し出す)の仕組みの中でできた組織。市内を中心に複数の施設を管理。その多くは行政関係が所有しており、ANNA は数ヶ月～1 年ほどテンポラリーに管理する。現在 8 人のメンバーと小規模体勢だが、10 年の間に行政や不動産オーナーとの信頼関係を作り、組織としても現在少しずつ大きくなっている。

https://www.annavastgoedencultuur.nl/

⑦ 調査を経て得た気づき、スキルなど

- ANNA の運営において大切なのは、建物をケアする(きちんと管理する)ことであった。利用者のマネジメントまでを含めて管理できれば、将来的により良い建物の使い方を展開できるのではという思いを持った。これを機に、アートのマネジメントと不動産を持っているところとの関係性をどう作っていくべきかという疑問、課題が生まれた。
- さまざまアーティストのスタジオ訪問をして、アーティストは試行錯誤しながら、自分たちの制作環境を獲得している状況であることがわかった。また、オランダでは不動産価格の高騰により、ジェントリフィケーションに対するデモも起きていた。どの時代においても、アーティストたちが自分たちのスタジオを獲得するのに大変な状況であるのに対して、不動産とアートのマネジメントの接点を見いだすことで新しいスタジオのあり方が見出せないかと考えている。
- 黄金町では、工房やキッチンスペースなどアーティストが生活や空間設備を整備することは重要だと思う。また専門的なアドバイスができるような人との関係強化などができるといいのではないかと考える。

### (2)水谷朋代の活動概要

① 渡航先｜プルゼニ(チェコ)

② 滞在目的｜ArtCamp に参加し、日本での ArtCamp 実施検討に関する調査を実施。

③ 滞在期間｜2018 年 7 月から約 1 ヶ月

④背景｜2013 年遊工房アートスペースと女子美術大学が取り組む国際交流事業「Y-AIR 構想」の一環として参加。

⑤ 調査内容｜AIR 運営者として、自身が海外での滞在制作体験をすることで、今後の AIR 活動に生かし、AIR の本質や有効性を自身で体感すること。また、ArtCamp に参加し、そこでのノウハウや運営形態を学び、日本での ArtCamp 実施において重要となる手法や仕組みを学ぶための研究調査をした。

⑥ 受入先｜ArtCamp

毎年夏に西ボヘミア大学芸術学部を拠点に開催される 3 週間のサマースクール。1991 年に創立した総合大学西ボヘミア大学に 2005 年芸術学部が設立され、同時に ArtCamp の取り組みを開始。新設された芸術学部をチェコ国内で周知し、大学のグローバル化を展開するためのプログラムとして位置付けられ、マーケティングツールとして実施している。

https://fdu.zcu.cz/en/415-artcamp-about

⑦ 調査を経て得た気づき、スキルなど

- 普段と異なる環境に身を置いて、新しい環境や文化の中で刺激を受ける中で、自分の人生を考える時間を得たという体感があった。
- プログラム参加申し込みなどウェブサイト構築の明瞭さ、到着の際に渡されるウェルカムパック(必要な情報や持ち物などをまとめたもの)の用意など、2005 年から継続実施し、経験を蓄積しているからこその準備の良さを感じ

た。システマティックな運営にすることで、少人数でも運営できるようになっているのは勉強になり、事前にどんな情報や条件があるとレジデンスに来た人が安心するのかという発見を得られた。このノウハウは黄金町の AIR 受け入れの際、生かした。

- 普段、アーティストのサポートをしているだけで自分が制作をすることはほとんどないが、今回 ArtCamp では制作をしてみて、作り手の気持ちを少し体験することができた。生みの苦しみなどを感じる経験は重要だと思った。
- 美大やギャラリーなど他団体との連携は今後考えていけるのではないかと思えた。
- 日本での ArtCamp 実施検討において、AIR と美大連携の可能性という点で、それぞれの強みを生かしていくと良いと思う。AIR はレジデンス施設やネットワーク、サポート体制が充実している。一方、大学は設備が充実している。双方の狙いと強みを生かした ArtCamp の実施は検討可能だろう。自立的な事業体制が組めれば限られた AIR と大学だけでなく、AIR 団体が連携して実施することも検討可能だろう。
- 日本の学生に対して行う場合、以下が考えられる。

  A) 目的：英語経験を高めるため

  海外アーティストを講師として招いたり、海外学生を招聘して交流の機会を持つことが重要になるだろう。

  B) 目的：普段とは異なる場所で自立した制作環境を体験するため

  都市と地方の大学が組むことで、学生の移動が可能になるのでは。
- 黄金町での実施検討案として以下が考えられる。

  A) 目的：ローカルアーティストの育成

  海外アーティストや批評家やキュレーターを講師として招聘し、英語体験や新しい知識を得られるようにする。その際は、事業内容に適切なスタジオや施設を持っている大学などとの連携も考えられる。

  B) 目的：黄金町 AIR の活動周知、マーケティング

  黄金町にいるローカルアーティストに講師になってもらい、国内外の学生を呼ぶことも考えられる。

  →そのリアリティはどのようなものか

  黄金町スタッフへの報告は今日が初めてなので具体的な話はしたことがない。目的を定めて実施すれば、検討可能。マーケティングツールとして位置づけるのは潔く、黄金町でも見習えるかと思う。大学との連携という意味では、あり得ると思った。大学は施設が充実していることに今回気づき、連携は積極的に行えるものだと感じた。

## 5. AIR シンポジウム＆研究会 （主催：UBE ビエンナーレ実行委員会）

### AIR シンポジウム

**アーティスト･イン･レジデンス シンポジウム 住む・作る・学ぶ アートが育む宇部の未来**

**日時｜**3月17日（日）14：30～17：00

世界で最も歴史のある野外彫刻の国際コンクール「UBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）」を半世紀以上にわたり実施してきた宇部市は、日本におけるパブリック・アート発祥の地ともいわれている。2018年からはアーティスト・イン・レジデンス事業（AIR）をスタートし、新たなアートによるまちづくりを模索している。この度、新たな手法で展覧会や教育事業に取り組むゲストを迎え、美術館における芸術教育やアーティストとの共同による事例紹介と議論を受け、パブリックアートのこれからのあり方について考える機会とした。

**1） ケーススタディ（ミュージアム×アーティスト×エデュケーション×地域）**

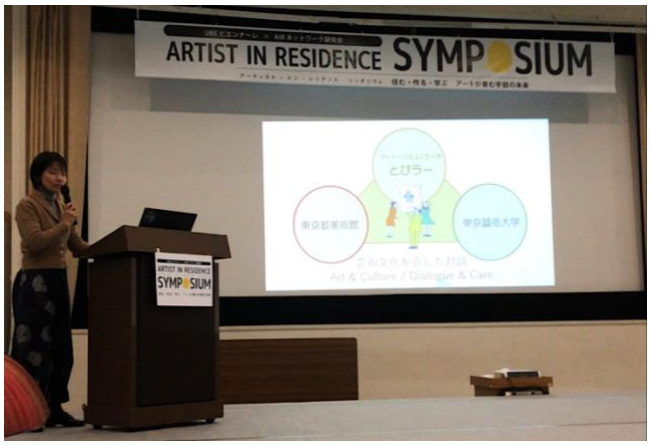
**ゲスト｜**稲庭 彩和子（東京都美術館学芸員）、柳沢 秀行（大原美術館学芸課長）

稲庭氏からは、東京都美術館で実践する「アートコミュニケーター」の活動について、柳沢氏より、大原美術館が実施するチルドレンズミュージアムをはじめとするパブリックプログラムなど、地域とともにある美術館のあり方について、それぞれの事例が報告された。

**2） トークセッション**

**登壇者｜**柳沢秀行、稲庭彩和子、藤原徹平（建築家）、豊福亮（美術家）、久保田后子（緑と花と彫刻の博物館館長）

**モデレーター｜**日沼禎子（女子美術大学教授、宇部市緑と花と彫刻の博物館アートディレクター）




### 研究会

**アーティスト･イン･レジデンス研究会：その役割と可能性について＜地域の未来とアーティストのかかわり＞**

**日時｜**3月16日（土）13：00～17：00 ときわ湖水ホール（ときわ公園内）

**参加団体｜（順不同）**

大原美術館 ARCO／瀬戸内国際芸術祭／高松市文化振興課／小豆島・迷路のまちアートプロジェクト MeiPAM（メイパム）／秋吉台国際芸術村／／山口情報芸術センター／YICA(山口現代芸術研究所)／Do a front／一般社団法人 松島分校美術館／門司港美術工芸研究所／その他、宇部市内の文化活動団体等

**オブザーバー｜**稲庭 彩和子（東京都美術館学芸員）／藤原 徹平（建築家、横浜国立大学准教授）

**モデレーター｜**日沼 禎子（女子美術大学教授、宇部市緑と花と彫刻の博物館アートディレクター）

AIRを持続的に展開、発展させるため戦略的活動、キュレーター、アート・マネジャー、プロデューサーなどに求められる人材、育成のあり方について議論し、課題の共有と検証を試みる。主に中四国九州圏の、AIR事業及びアート活動に取組む事業担当者とともに各地の事例を共有するとともに、相互のネットワーク形成を目指して実施された。

### 1）ケーススタディ「山口、九州エリアのアートシーンについて」藤川哲｜山口大学教授

### 2）各地域のレジデンス事業の紹介…各参加団体からのプレゼンテーション

### 3）AIR研究会（AIRと地域の未来、人材育成について）

参加者・団体で4つのグループに分かれ、下記4つのテーマに沿ってディスカッションを行なった。AIRの評価に関わるさまざまなキーワードを抜粋する。

#### ① アーティストが関わることで、地域（誰に、何に）にもたらされた変化、エピソード

- こどもたちや地域住民が触発された自発的な活動
- 担当者も含め、自分の力を発見できる
- 地域資源をあらためて発見、確認、identity、風景、名所、歴史
- 住民に波及させていくときに、いろいろなインターフェイスがあるといろいろ関わることができる
- 食、ヨガなどを通して、そこから関心をもってもらい、広がっていく
- 新しいアートの楽しみ方を知った
- 彫刻のまち宇部の再発見
- こういう表現があったという新鮮さ
- 次の変化をもたらす変化の「根」
- いい作品が残ることで、いい環境がつくられる
- 行政、企業、組織、住民同士のネットワークができていく
- ものとして強いもの、弱いものもふくめ、記憶が町に残っていく

#### ②これからAIRを通じて、地域（誰と、何と、何処で）において取り組みたいこと、期待することは？その理由。

- 取り組まれたことが、余白の部分で一般の人が企画をたちあげる。スピンアウトのような企画につながる
- 地域間の連携によるひろがり
- 多様な人がつながっていくことが重要。コミュニケーションが重要
- ノンバーバルコミュニケーション、言語だけに頼らない
- 忍耐力
- 知られていない国の作家、人々を紹介するようなアクションをしていきたい
- 市民の創造性を高めていく
- 拠点をつくりたい。そのためには場所を選ばない方がよいのではないか
- 公募だけではなく、地域とアーティストを組み合わせていく企画
- マイクロレジデンスでは、地元のおもしろいネタ、エピソードをきちんと掬い上げたい
- 継続していく、蓄積していくことが前提
- 予算確保をどうするか。企業や行政からの資金などの情報を共有できるとよいのではないか
- 担当が変われば記録がつながっていかないことがある。どの程度、どのように共有していくか
- 現実的な問題・課題の共有
- AIRに書き手（小説家、ライターなど）を招くとよい。（海外へ配信するためには翻訳の課題がある）

#### ③AIRを運営するにあたり、必要な資質、スキルとは何か？それらをアップするためには何が必要か？

- ネットワークで研修する。組織の規模によって違うと思うが、研修、協働の場
- アーカイブとその共有をどのように行なっていくか

- アーティストのリクエストにこたえていくための経験を、同じAIR担当者とどのようにシェアしていくか
- 事業の指標をつくること
- アーティストや社会的インパクトのために、賞をつくるとよい
- 広報に必要なネットワーキング
- 広く社会にアピールするための広報
- AIRの必要性を説得するための説得力、スキル
- ハートの強さ
- モチベーションをどのように維持していくのか
- 批判に耐える力
- 経営者は孤独なので、悩みを共有したい
- 提案し続けることが大切
- スタッフの交換プログラム
- 継続性、蓄積のための予算確保（
- 企業、行政と協働できるような仕組みを利用できること
- 共有した情報を利用していけるようなスキル
- 言語スキル、伝えるための言葉選び
- 情報の編集。戦術。言葉のトーン
- アーティストに対して、建前上（地域のために、、、など）の言語を使わないで、トーンをどのように整えるか
- どうして AIR をやるの？　という問いに対して、「人との関わりを継承していく」「人と出会える」ということが面白いという意見が多かった

### ④ 今後ネットワーク（研究会）にのぞむこと、期待することとは？

- 大きいAIRと小さいAIRがコンビを組んで協力。それぞれの強みを使い、手を携えていく
- 人のつながりが増えていったときに、同窓会のような、振り返る機会があると良いのでは
- スキルをシェアする場
- 具体的な研修、経験をする場
- それぞれの事業を相対化できること。
- 多様な事業主体が出会うこと
- 今後増えるであろうマイクロAIR同士が抱えている課題をシェアすること
- それぞれの課題、自分たちでは解決できないことを、ゲストレクチャラーや、助っ人のディレクトリがあるといい
- 報告の仕方。数字、どういう見せ方をするかの研究
- 今回のような場を設けること
- 内容、システム、活用の仕方、課題を年1で共有し、報告書を作成する
- 瀬戸内海文化圏での事業例、報告、出版を共同で行う
- 単純な報告だけではなく、取材をし、具体的で面白いものものをつくる

・　中四国九州の文化圏は重なるものがあるので、ネットワークを広域にしていくことも重要ではないか

# アーテイスト・イン・レジデンスに関するアンケート調査

［集計および解説：大澤寅雄］

## 調査の目的と概要

### 【調査目的】

芸術家の育成やネットワークづくりあるいは地域文化の振興等の観点で注目されているアーティスト・イン・レジデンス（以下「AIR」という）に関わる事業の実施団体に、AIR を担う人材のニーズや育成に関するアンケート形式の調査し、その有効性等を検証することで、我が国における今後の文化政策に資することを目的とする。

### 【調査概要】

実施期間：2018 年 10 月 18 日～11 月 26 日
調査方法：電子データ（PDF フォーム形式）の質問票のメール配布、メール回収による
調査対象：日本国内で AIR 事業を実施する 72 団体に送付（日本全国のアーティスト・イン・レジデンス総合データベース「AIR_J」の登録団体、及び文化庁「H30 年度 アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業」の実施団体
有効回答数：45 件｜有効回答率：62.5%

### 【調査内容】

- 回答団体の属性（法人認証年月、主たる芸術文化活動分野、AIR の施設機能の有無）
- 事業内容（事業経費、参加人数・参加国、平均滞在期間、活動内容、事業担当スタッフの雇用形態別人数、専門職）
- 人材育成（回答者の立場、「人材不足」とする課題の認識、人材の育成方法と有効性、AIR 事業で必要な能力や資質）

## アンケート１枚目

女子美術大学×文化庁「新たな文化芸術の創造を支える活動支援及び人材育成のためのプラットフォーム形成研究」

# アーティスト・イン・レジデンスに関するアンケート調査

女子美術大学では、「文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業」として、現在、芸術家の育成やネットワークづくりあるいは地域文化の振興等の観点で注目されているアーティスト・イン・レジデンス（以下「AIR」という）についての取り組み事例や諸課題等を調査しています。このたび、AIR に関わる事業を実施されている団体に、AIR を担う人材のニーズや育成に関するアンケート形式の調査にご協力いただきたく、どうかよろしくお願いいたします。なお、回答記入の所要時間は 20 分程度の内容となっています。（データ集計が必要な場合は別途その時間がかかります）

なお、PDF ビューワ（Acrobat Reader）から回答する場合、右上の送信ボタンを押して送信すると、お使いのメールサービスが起動し、そこから簡単・安全に送信をすることができます。回答内容を保存しておくには、送信前に一度保存してください。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 団体名 | | | |
| 肩書き | | Tel | |
| フリガナ | | Fax | |
| 回答者氏名 | | URL | |
| 住所 | | 郵便番号 | |
| email | | | |

### ◉ 貴団体についてお伺いします。

**Q1.** 貴団体の法律上の地位（法人格等）であてはまるものをお選びください。（☑はひとつだけ）

☐地方公共団体（首長部局と教育委員会のどちらも）　☐公益財団法人、公益社団法人
☐一般財団法人、一般社団法人　☐特定非営利活動法人　☐株式会社、有限会社
☐任意団体、実行委員会　☐その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

**Q2.** 貴団体の主たる芸術文化活動分野について、あてはまるものを選択して下さい。（☑はひとつだけ）

☐音楽　☐演劇　☐舞踊・ダンス　☐美術　☐映像・映画　☐伝統芸能　☐生活文化
☐複数の分野を横断する　☐芸術文化に関する活動は実施していない　☐その他（具体的に＿＿＿＿）

**Q3.** 貴団体には、所有または管理運営する、**AIR** 事業を行うための施設や機能（アトリエ、スタジオ、ホール、稽古場、宿泊施設など）がありますか。（☑はひとつだけ）

☐ある（➔SQ3-1）　☐ない（➔Q4）

**SQ3-1.** **Q3** で「ある」と答えた方は、該当する施設の機能を全て選択してください。（☑はいくつでも）

☐劇場／ホール　☐スタジオ／稽古場　☐ギャラリー／展示室　☐アトリエ／作業場
☐映写室／編集室　☐宿泊施設　☐その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

### ◉ AIR 事業における活動支援や人材育成の取り組み内容について伺います。

**Q4.** **2017** 年度に貴団体が実施した **AIR** 事業の経費について、最も近い選択肢をお答えください。（☑はひとつだけ）

☐250 万円未満　☐250 万円以上 500 万円未満　☐500 万円以上750 万円未満
☐750 万円以上 1,000 万円未満　☐1,000 万円以上 2,000 万円未満　☐2,000 万円以上 3, 000 万円未満
☐3,000 万円以上

## アンケート 2 枚目

**Q5.** **2017** 年度に貴団体の **AIR** 事業に参加したアーティスト等の人数を、地域・国別（活動の拠点を置く地域・国）にお答えください。（ユニットの場合は構成するメンバー**1** 名ずつをカウントしてください）

＊地域・国の区分は、外務省 **HP** 各国・地域情報 https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html を御参照ください。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 日本 | 名 | 中南米 | 名 | 中東 | 名 |
| アジア（日本を含まない） | 名 | 欧州 | 名 | アフリカ | 名 |
| 北米 | 名 | 大洋州 | 名 | | |

**Q6.** **2017** 年度に貴団体が実施した **AIR** 事業で、アーティスト等 **1** 人・組あたりの 平均の滞在期間について、最も近い選択肢をお答えください。（☑はひとつだけ）

☐1 週間未満　☐1 週間以上～1 ヶ月未満　☐1 ヶ月以上～3 ヶ月未満　☐3 ヶ月以上

**Q7.** 貴団体の **AIR** 事業の内容（活動内容）についてあてはまるものすべてを 選択してください。（☑はいくつでも）

☐創作環境の提供（アトリエ、スタジオなど）　☐滞在施設の運営（宿泊室、キッチンなど）
☐制作プロセスの公開（オープンアトリエ、オープンスタジオなど）　☐展覧会、公演
☐ワークショップ　☐シンポジウム、セミナー、レクチャー　☐調査研究、リサーチ
☐交流会、親睦会　☐その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿）

**Q8.** 貴団体の **AIR** 事業の担当スタッフの人数を、雇用形態別にお答えください。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 正規職員（無期雇用） | 名 | 臨時職員・アルバイト | 名 |
| 正規職員（期間限定雇用） | 名 | ボランティア | 名 |
| 非常勤職員 | 名 | その他（具体的に＿＿＿＿＿＿） | 名 |

**Q9.** 貴団体の **AIR** 事業の担当スタッフで、以下のような専門的な知見、技術、人的ネットワークを有する専門職は配置していますか。（☑はひとつずつ）

| | |
|---|---|
| プロデューサー<br>プロジェクトの企画を立案し、制作、実施を統括する人材 | ☐専門職として配置している<br>☐専門職だが他の事業や職能との兼務である<br>☐専門職ではないが担当者を配置している<br>☐専門職も担当者も配置していない |
| キュレーター<br>展示や成果発表などで、アーティストや作品を選定し、マネジメントする人材 | ☐専門職として配置している<br>☐専門職だが他の事業や職能との兼務である<br>☐専門職ではないが担当者を配置している<br>☐専門職も担当者も配置していない |
| コーディネーター<br>滞在アーティストの地域における創作やリサーチ活動の調整、支援をする人材 | ☐専門職として配置している<br>☐専門職だが他の事業や職能との兼務である<br>☐専門職ではないが担当者を配置している<br>☐専門職も担当者も配置していない |

### ◉ AIR 事業に必要な人材育成について、あなたご自身のお考えを伺います。

**Q10.** ご回答される方ご自身の、貴団体でのお立場であてはまる選択肢をお答えください。（☑はいくつでも）

☐貴団体（貴法人）の管理職（組織としての決裁権のある役職）
☐AIR 事業に関わる管理職（事業での責任や権限を持つ役職）
☐AIR 事業に関わる担当職（事業の遂行や現場を担当する職務）

## アンケート 3 枚目

**Q11.** 貴団体の **AIR** 事業の実施において、「人材不足」を課題とする以下のような意見について、あなたご自身はどのようにお考えですか。

意見①「**AIR** 事業のための**人員数が**不足している」

- ☐とてもそう思う
- ☐まあそう思う
- ☐どちらとも言えない・わからない
- ☐あまりそう思わない
- ☐まったくそう思わない

（☑はひとつ）

→ 左記の意見に「とてもそう思う」「まあそう思う」と答えたかたは、人員数の不足を感じる職能を右記の中から選びください。

→
- ☐プロデューサー
- ☐キュレーター
- ☐コーディネーター

（☑はいくつでも）

意見②「**AIR** 事業のための**専門性が**不足している」

- ☐とてもそう思う
- ☐まあそう思う
- ☐どちらとも言えない・わからない
- ☐あまりそう思わない
- ☐まったくそう思わない

（☑はひとつ）

→ 左記の意見に「とてもそう思う」「まあそう思う」と答えたかたは、専門性の不足を感じる職能を右記の中から選びください。

→
- ☐プロデューサー
- ☐キュレーター
- ☐コーディネーター

（☑はいくつでも）

**Q12. AIR** 事業で必要とされる人材の以下の育成方法について、あなたご自身はその有効性をどのように評価しますか。

| （☑は各列でひとつずつ） | とても有効である | まあ有効である | どちらともいえない | あまり有効ではない | まったく有効ではない |
|---|---|---|---|---|---|
| （AIR とは関係なく）語学の学習 | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ |
| （AIR とは関係なく）芸術学や美学の学習 | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ |
| 座学による基礎的なアートマネジメント講座 | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ |
| 座学による AIR 事業のノウハウに特化した講座 | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ |
| 短期（1 日から数日間）の AIR の現場体験 | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ |
| 中期（数週間から数カ月間）の AIR の実務研修 | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ |
| 長期（1 年以上）の AIR 実施機関での OJT（On-The-Job Training） | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ | ☐ |

**Q13.** 貴団体では、**AIR** 事業の担当スタッフをどのように育成していますか。以下の育成方法で、実施しているものを選択してください。（☑はいくつでも、選択肢以外の育成方法がある場合は「その他（具体的に）」を、育成に取り組んでいない場合は「いずれも取り組んでいない」を選択してください）

- ☐語学研修や自主的な学習に対する支援
- ☐芸術学や美学の習得や自主的な学習に対する支援
- ☐貴団体や外部団体が実施するアートマネジメント講座の受講
- ☐貴団体や外部団体が実施する AIR 事業のノウハウに特化した講座の受講
- ☐外部団体が行う AIR での短期（1 日から数日間）の現場体験
- ☐外部団体が行う AIR での中期（数週間から数カ月間）の実務研修
- ☐外部団体が行う AIR での長期（1 年以上）の OJT（On-The-Job Training）
- ☐その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）
- ☐いずれも取り組んでいない

## アンケート４枚目

**Q14.** ご自身の組織において、**AIR** 事業で必要な能力や資質について、不足していると感じるものを選択してください。（☑は2つまで）

☐語学力　☐マネジメント能力　☐コミュニケーション能力

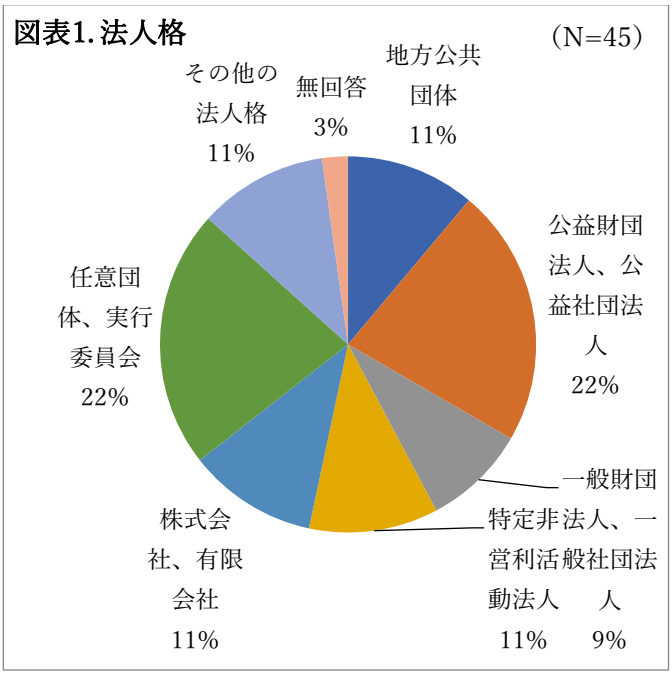
☐コーディネート力　☐その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿）

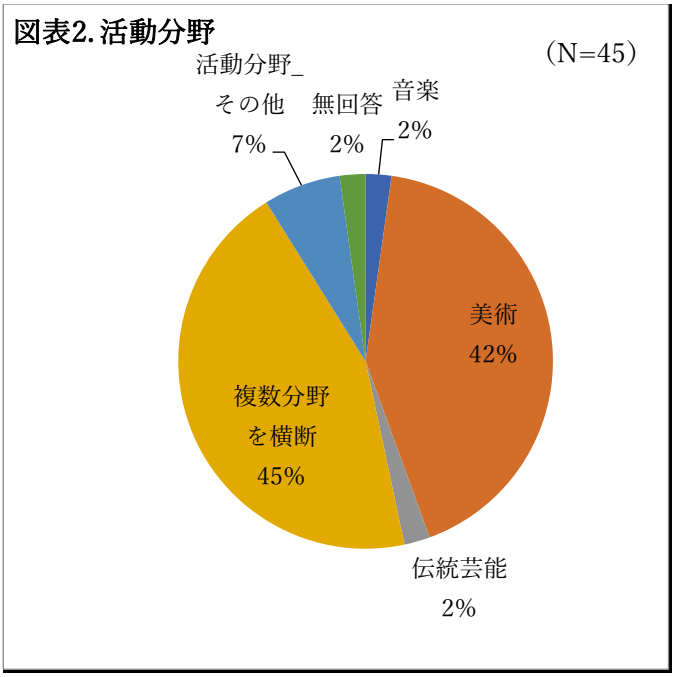
**Q15. AIR** 事業における人材育成について、貴団体が独自で行っている方法や、具体的な提案があればご自由にお書きください。

以上です。ご協力ありがとうございました。

## 【調査結果】

### (1) 回答団体の属性

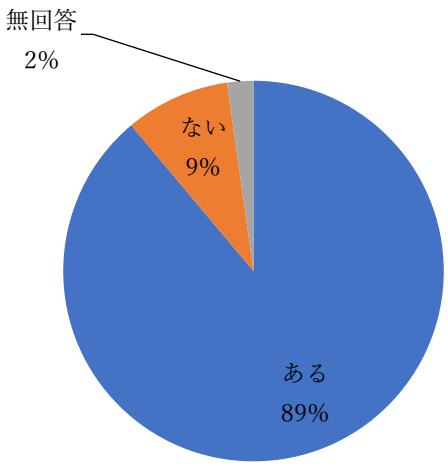



回答団体は「公益財団法人」と「任意団体、実行委員会」がともに 22%(10 件)ずつ、「地方公共団体」、「特定非営利活動法人」、「株式会社、有限会社」、「その他の法人格」が 11%(5 件)ずつとなっている(図表 1)。活動分野は「複数分野を横断」が 44%(20 件)で最も多く、次いで「美術」が 42%(19 件)となっている(図表 2)。

**図表3. 所有または管理運営する施設や機能**

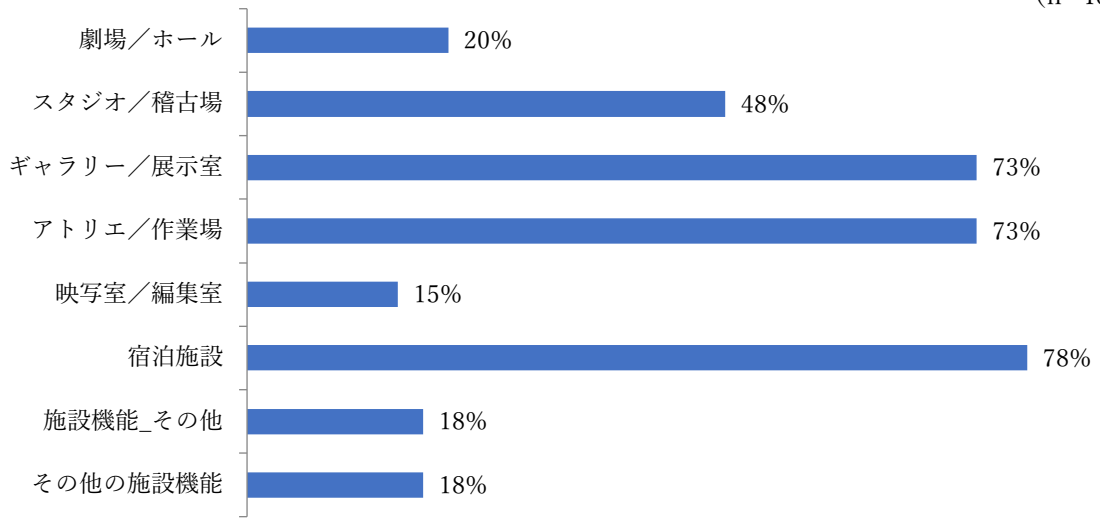
（N=45）




回答団体が所有または管理運営する施設や機能が「ある」団体は89%（40件）、「ない」団体は 9%（4 件）となっている（図 3）。管理運営する施設や機能が「ある」と回答した40件の団体は「宿泊施設」を有する団体が78%（31 件）で最も多く、「ギャラリー／展示室」と「アトリエ／作業場」が73%（29件）、「スタジオ／稽古場」が 48%（19 件）となっている（図表 4）。

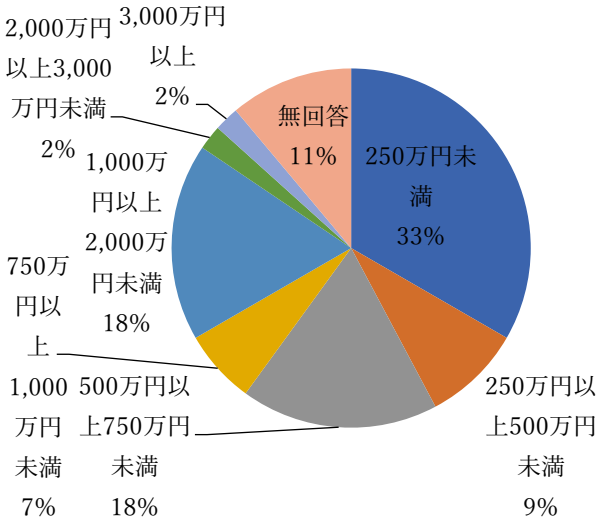
**図表4. 該当する施設の機能**

（n=40）




**図表5. 事業経費**

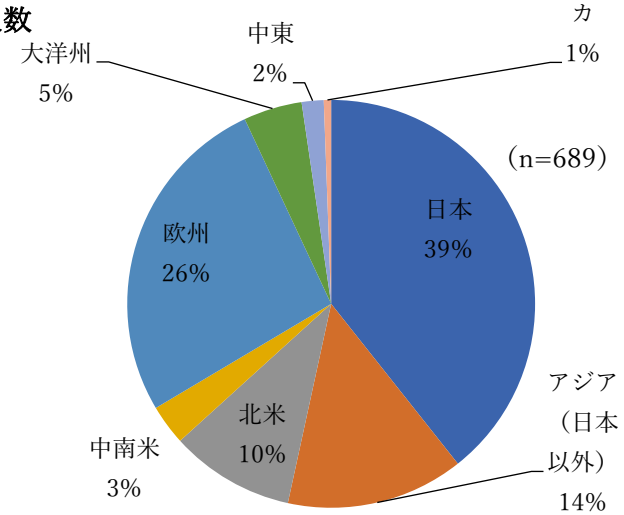
（N=45）



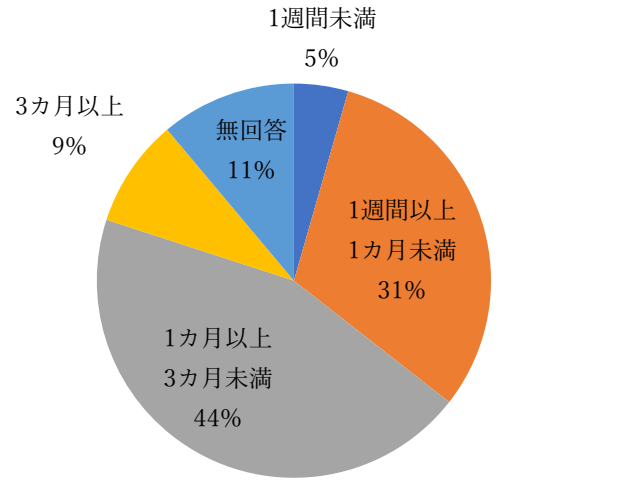

事業経費は「250 万円未満」が 33%（15 件）で最も多く、次いで「500 万円以上 750 万円未満」と「1,000 万円以上 2,000 万円未満」がともに 18%（8 件）ずつとなっている（図表 5）。

## (2) 事業内容

図表6. 参加アーティスト等の地域・国別人数




図表7. 平均滞在期間



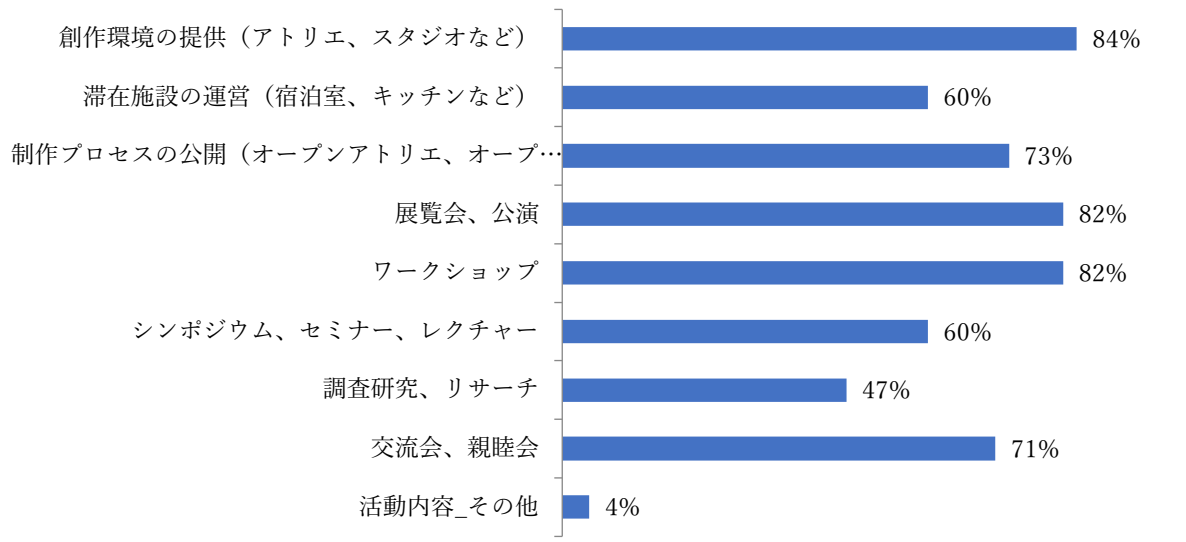

2017 年度の AIR 事業に参加したアーティスト等の人数を回答団体で合計すると、689 人となる。

参加したアーティスト等の 689 人の国・地域別の割合は、「日本」が 39%(271 人)で最も多く、次いで「欧州」が 26%(183 人)、「アジア(日本以外)」が 14%(97 人)という順になっている(図表 6)。

AIR に参加するアーティスト等の平均滞在期間は「1 カ月以上 3 カ月未満」が 44%(20 件)、「1 週間以上 1 カ月未満」が 31%(14 件)となっている(図表 7)。

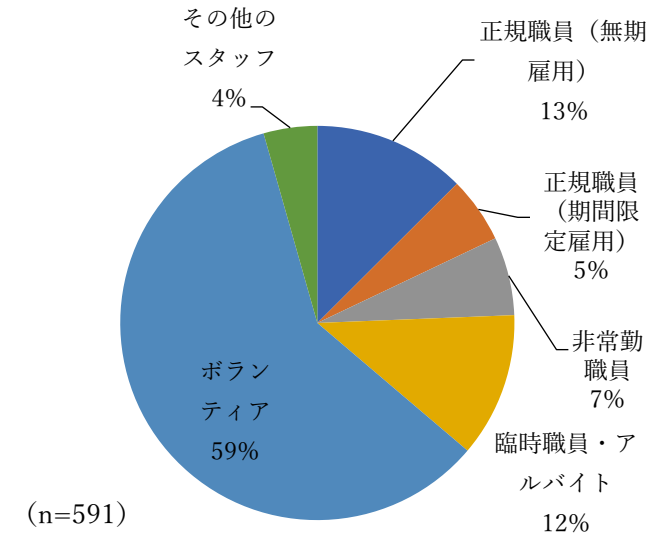
AIR 事業の活動内容は、「創作環境の提供(アトリエ、スタジオなど)」が 84%(38 件)、「展覧会、公演」と「ワークショップ」がともに 82%(37 件)ずつとなっている(図表 8)

図表8. AIR事業の活動内容



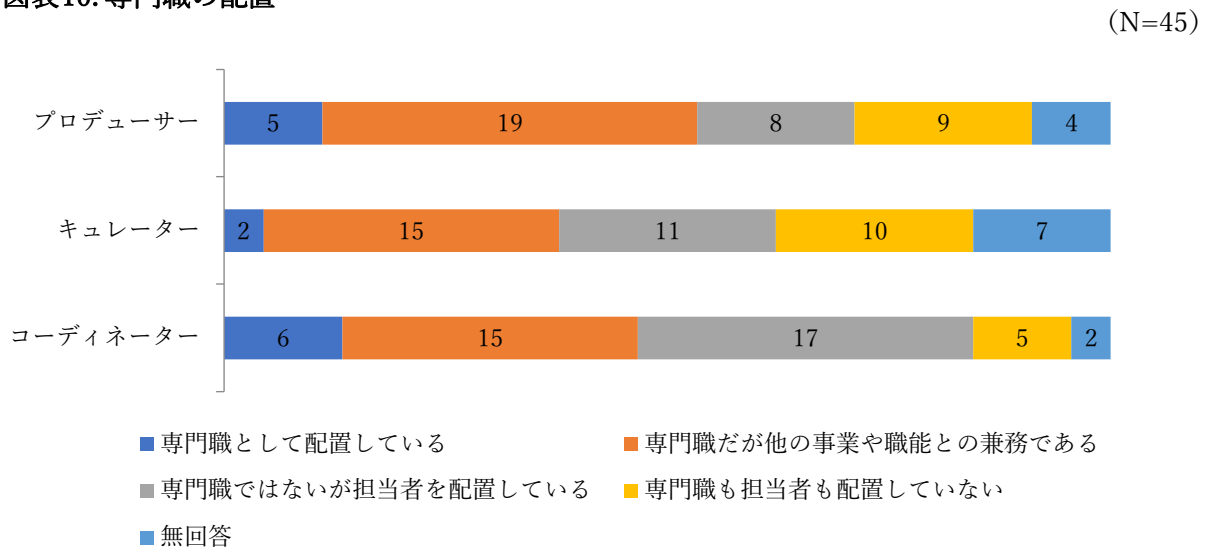
### (3) 人材配置

**図表9. 雇用形態別の担当スタッフ人数**



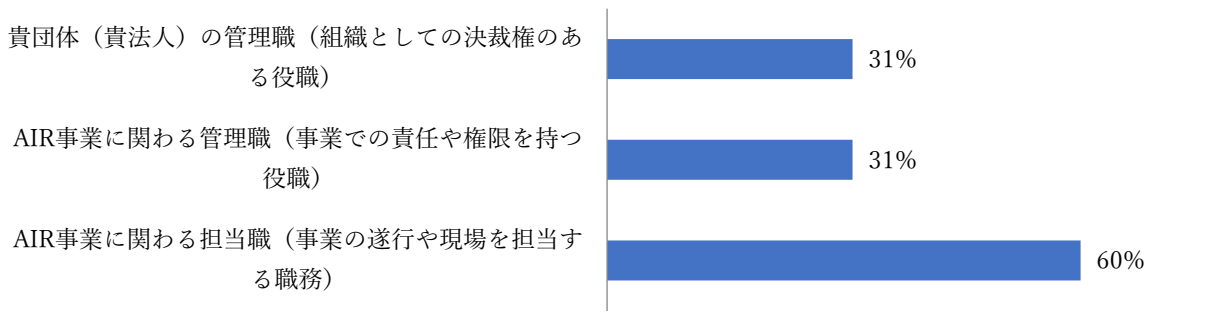

AIR 事業を担当するスタッフの人数を回答団体で合計すると、591 人となる。
AIR 事業の担当スタッフ 591 人の雇用形態別の割合は「ボランティア」が 59%(351 人)で過半の割合となっており、「正規職員(無期雇用)」は 13%(74 人)、「臨時職員・アルバイト」は 12%(70 人)、「非常勤職員」は 7%(38 人)となっている(図表 9)。

**図表10. 専門職の配置**



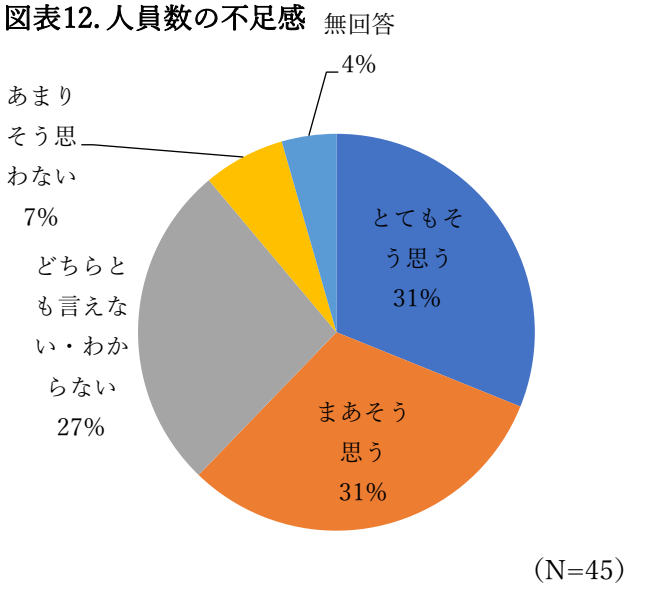

AIR 事業の専門職として「プロデューサー」、「キュレーター」、「コーディネーター」の 3 つの職種について聞いたところ、何らかの形で「配置している」という回答(「専門職として配置している」+「専門職だが他の事業や職能との兼務である」+「専門職ではないが担当者を配置している」)のが多い回答は「コーディネーター」で、45 団体のうち 38 団体(84%)が配置している。次いで「プロデューサー」の配置が 32 団体(71%)、「キュレーター」は 28 団体(62%)となっている。

**図表11. 回答者自身の立場**




本アンケート調査の回答者の立場は「AIR 事業に関わる担当職」が 60%(27 人)で、「AIR 事業に関わる管理職」と「団体の管理職」はともに 31%(14 件)ずつとなっている。

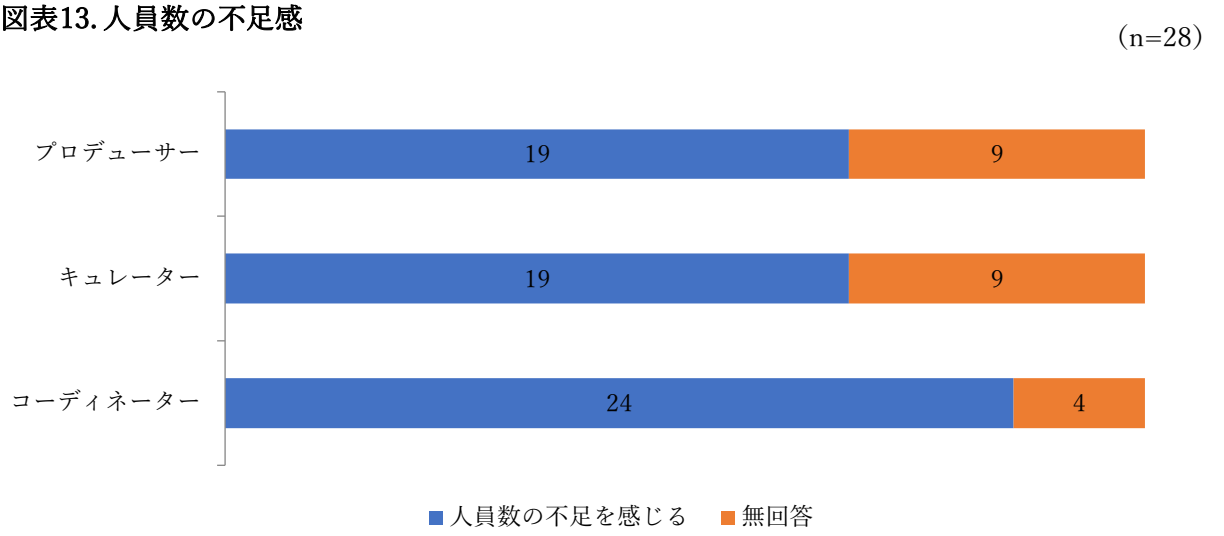
**図表12. 人員数の不足感**

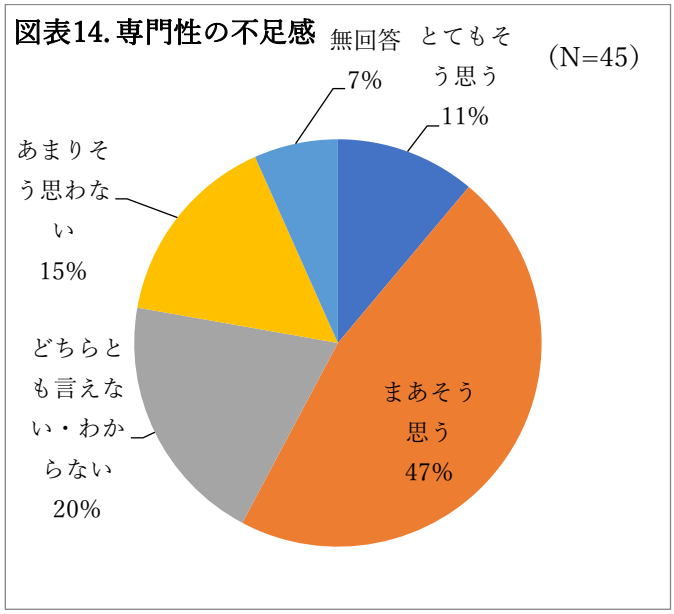



AIR 事業の人材不足について「人員数の不足」を課題として感じているか聞いたところ、「とてもそう思う」と「まあそう思う」がそれぞれ 31%(14 件)ずつとなっており、「どちらとも言えない・わからない」は 27%(12 件)となっている(図表 12)。

人員数の不足感を感じている 28 件に、どの職能で不足を感じるか聞いたところ、「コーディネーター」の回答が最も多く 24 件となっている(図表 13)。

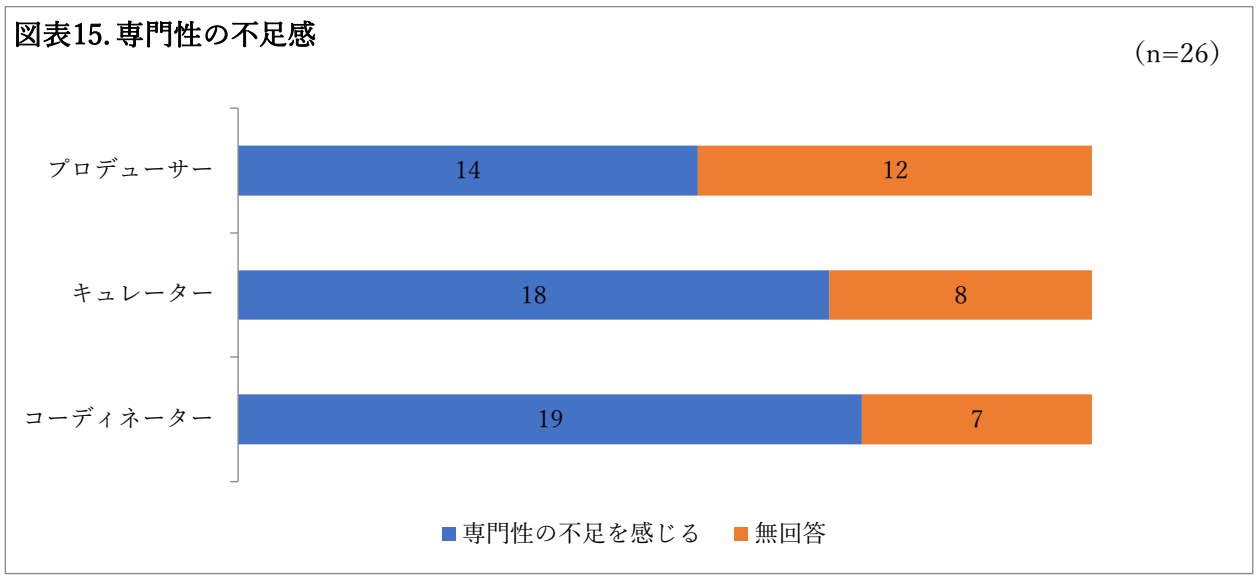
**図表13. 人員数の不足感**





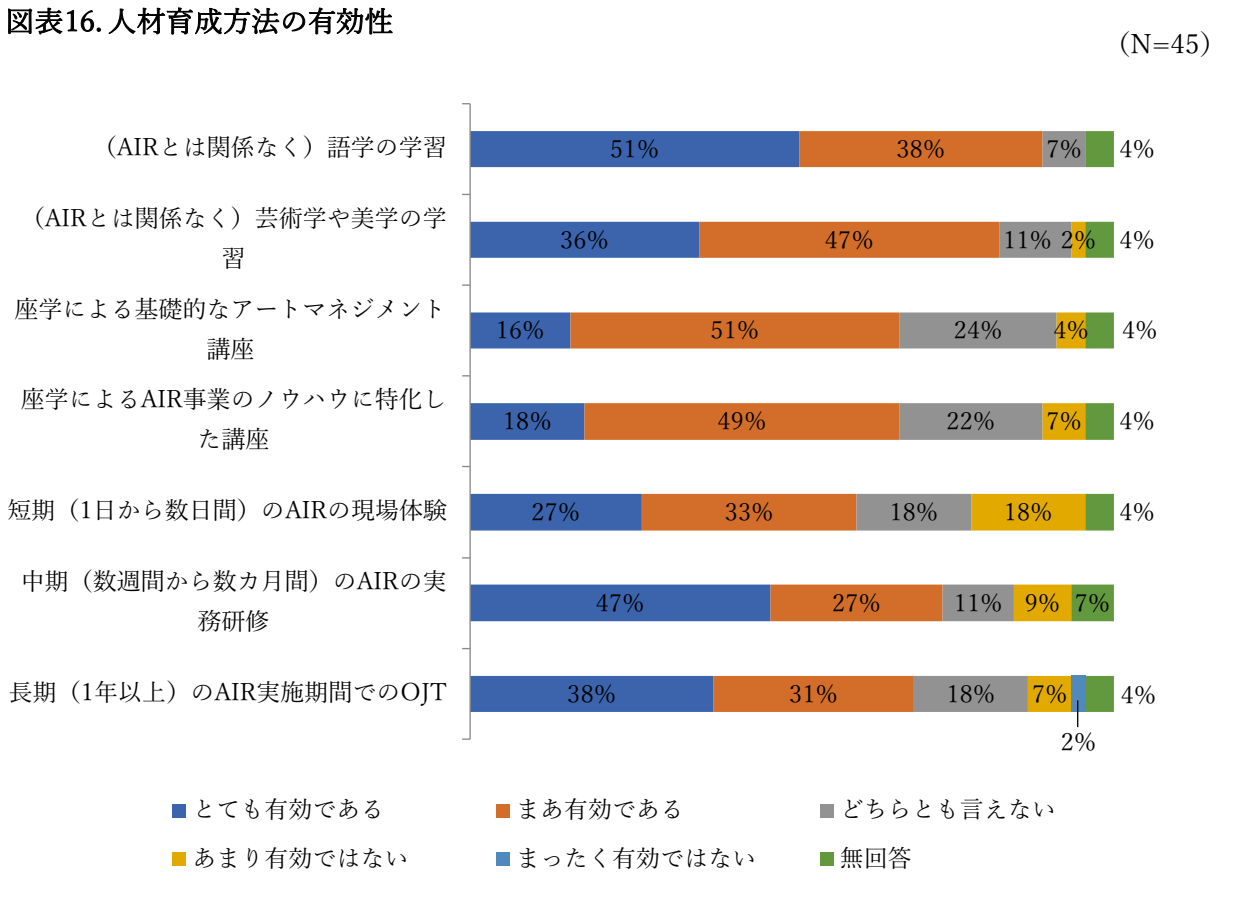

AIR 事業の人材不足について「専門性の不足」を課題として感じているか聞いたところ、「とてもそう思う」11%(5 件)と「まあそう思う」47%(21 件)で、「どちらとも言えない・わからない」は 20%(9 件)となっている(図表 14)。

専門性の不足感を感じている 26 件に、どの職能で不足を感じるか聞いたところ、「コーディネーター」の回答が最も多く 19 件となっている(図表 15)。



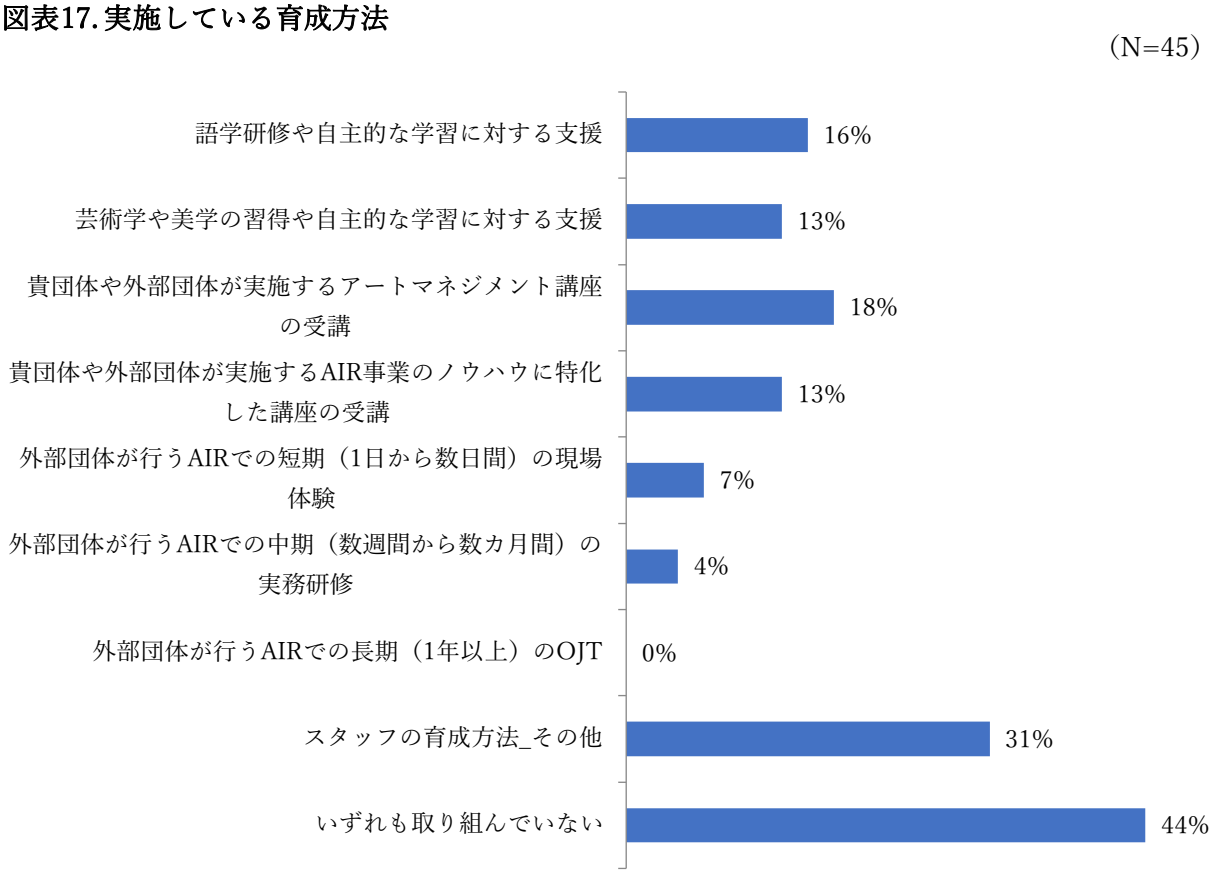
### (4) 人材育成

図表16. 人材育成方法の有効性



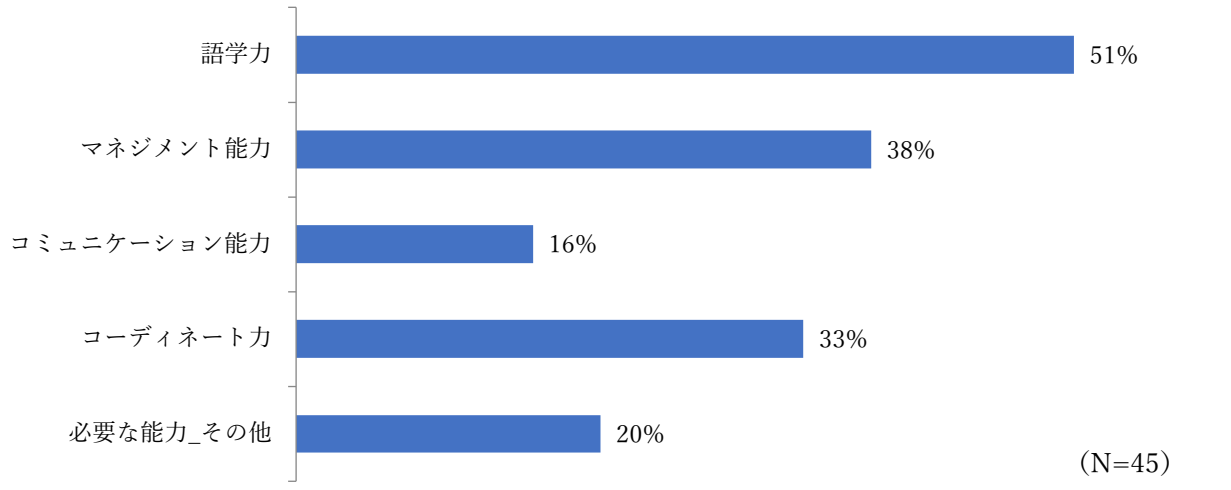

AIR 事業で必要とされる人材の育成方法で選択肢を与えて有効性を聞いたところ、「有効である」(「とても有効である」+「まあ有効である」)とする割合が最も高いのは「語学の学習」が 89%(「とても有効である」51%(23 件)+「まあ有効である」38%(17 件))で、次いで「芸術学や美学の学習」が 82%(「とても有効である」36%(16 件)+「まあ有効である」47%(21 件))となっている。「とても有効である」という積極的な回答は、「語学の学習」51%(23 件)に次いで「中期(数週間から数カ月間)の AIR の実務研修」が 47%(21 件)となっている(図表 16)。

**図表17.実施している育成方法**




AIR 事業での人材育成で実施している方法について選択肢を与えたところ、「いずれも取り組んでいない」が 44%(20 件)で最も多く、次いで「スタッフの育成方法_その他」が 31%(14 件)、「貴団体や外部団体が実施するアートマネジメント講座の受講」が 18%(8 件)となっている(図表 17)。「スタッフの育成方法_その他」の自由記述では「現場に立ちながら学ぶ」、「主に施設内での OJT」、「現場での OJT」といった回答が複数見られる。

**図表18.不足している能力や資質**




自身の団体の AIR 事業で必要な能力や資質について、不足していると感じるものについて選択肢を与えたところ、「語学力」が 51%(23 件)で最も多く、次いで「マネジメント能力」が 38%(17 件)、「コーディネート力」が 33%(15 件)となっている。

## (5) AIR 事業における人材育成で独自の方法・具体的な提案

**【講座・研修等】**

- アートのための英会話講座
- 新しい AIR とのアーティストエクスチェンジをしながらの、スタートアップサポートプログラム
- 大学と連携し、単位化したインターンプログラム
- 国内外の大学などから 3 ヶ月～1 年程度インターンを受け入れ、AIR 運営のノウハウの共有に務めている。
- インターンを受け入れることにより、芸術文化事業に関心のある国内外の学生/若い人材の AIR そのものへの周知に繋げ、幅広い分野からの人材獲得を図る取り組みを実験的に行っている点
- AIR 関連施設間での連携を強め、コーディネーターの交換を連携施設同士行うことにより、お互いのノウハウ、課題解決などを交換するネットワークの形成を図りたいと考えているが実現までには至っていない
- 国内外の AIR 機関、大学との協働活動の実践
- 実習・研修〈インターンシップ〉
- 本年度、初めての試みとして、「インターン・イン・レジデンス」を実施。国内外への公募を通して選ばれた2名（ベトナム1名とフィリピン1名）を招へいし、3カ月間、当施設にレジデンスをし、実践を通した学びの機会を提供した。また、レジデンス期間中には、外部講師として他団体から AIR 実践者を招いたレクチャーを開き、多様な AIR のあり方、その実践を学んだ。
- 専門家を招聘し、リサーチやトークセッション、コンサルティングを行ってもらっている。

**【国際会議、連携事業、ネットワーク等】**

- 国内外のレジデンスによるカンファレンス型合宿セミナー
- 知識を吸収する機会やツールは求めればあることも周知すべきであろうと思う。例えば、Res Artis 国際ネットワーク会議などはよい機会になりうる。
- 活動歴の長い国内の AIR 施設に赴き、幅広く教えをいただくよう務めることを推奨
- 他団体のイベントへ赴き、その経験から学ぶことを推奨
- 若手作家交換、専門家派遣・受入など
- 国際会合参画・企画
- 県内の AIR 団体と連携して事業を実施することで、事業運営に必要な知識の共有を図っている。
- 連携先の AIR 団体への質疑や人材派遣等で、人材指導を行ってもらっている。
- 近隣の公共施設や大学、NPO 法人からスタッフ派遣や協力事業やアドバイスをいただいている。
- 他レジデンスとの人材交流をしたいと考えている。

**【文化政策・行政による支援制度】**

- コーディネーターまたは AIR に携わる人材への育成に関わる支援（人件費支援・労働環境支援）の重要性は熟考されるべき案件で専門分野の従事者であることを認知される必要がある。
- 全国で 10 年以上実施している組織も増える中、日本の AIR をアーカイブ化する役割として国、または第三者組織が確保されることが望ましい。
- 日本の AIR を望むアーティストは増加傾向にあるため、国外から日本の AIR 情報にアクセスできるポイントが必要と思われる。

**【その他】**

- AIR をスタートしたい団体や個人へのカウンセリング
- 人材育成のためには、人材を育成するに資する「教える立場」の人材が不可欠だと考えます。
- 現在、AIR 事業に携わる現場担当者がまず AIR に関する学習を行うには、AIR の多様性を知り、自身の仕事場がどのような背景で成立しているのかなど情熱だけではない客観的な検証方法を覚えることが先決であろう。この内容に関する人材育成事業を企画運営することに興味がある。
- 長年実施してきた活動記録を整備し、アーカイブ化して一般に公開できるよう精査し、90 年代からの日本における AIR の歩みについてまとめ、研究者や市民,外部の AIR 従事者など誰もが共有できうるようにするための準備事業を行っている。しかしアーカイブや資料保存に特化した人材が不足しているため、AIR に特化したアーカイブ技術・コンサベーション技術のある人材育成が必要と考えられる。

- 当団体では音楽や建築、映像、写真、舞台芸術、翻訳など様々な専門性を持ったスタッフが集まって運営していることが特徴。そのためそれぞれの現場でより専門性を磨くことで、全体のコーディーネートの質を高めることを目指している。
- 定期的に過去の滞在アーティストへ連絡をとり当団体へのフィードバックをもらっている。良い面／悪い面いずれも率直なアーティストからの感想はプログラム運営の改善やスタッフの今後に活かされている。
- スタッフが国内外の AIR 実施団体を訪問することで、多様な運営ノウハウを学ぶ機会を設けている。またその学びを他のスタッフや一般の方々とも共有するための報告会を公開で定期的に行っている。
- 外国籍のコーディネーター人材の獲得/教育により、海外との連携の強化を図り、海外の AIR 施設運営のノウハウを積極的に学ぶこと
- 施設管理に対する社員教育に力を入れている点
- 助成財団である特質を活かし、
  1. AIR をきっかけに誕生した事業の助成プログラムによる継続支援を実施。
  2. 招聘したプロデューサー、プレゼンター、キュレーターたちとのネットワークを基に国際協働事業を立ち上げ、国内外の芸術家の参加を奨励している。
  3. また、舞台芸術分野におけるAIR事業の普及のために、東京外の拠点との連携を考えている。
  4. 将来的には、来日者が一拠点だけではなく、複数の場所を訪問、リサーチできるような仕組みがあれば良い。
- 限られた人員と配置の中で AIR に携わる者の機能として、プロデューサー、キュレーター、コーディネーター、3つそれぞれを横断する視点と思考、具体的実行、語学力を求められるのが現状です。
- 地域における創作活動を地域の芸術振興に活かす取り組みが十分とはいえない。
- 本年度より新規に採用した事業のため人材育成の実績を持たないが、課題としては次のことが挙げられる。
  - 地域の状況や環境、アーティストの制作・活動の手法がそれぞれ異なるため、人材に求める資質や能力を規定することが難しい。
  - 個々の現場体験を手法として集約し、蓄積する方法を開発する必要がある。
- 語学についても、私もまだまだ不十分ですし、もちろん近所の方たちはなおのことできない状況ですが、やはり、一番大事なのはコミュニケーション能力だと思います。
- 弊団体では作家の制作のサポートに従事していく中で、人材が育成されます。
- 当館ではアートコーディネーターの育成もミッションとし、当館で経験を積んだのち（1 年契約・3 年年限）、各地の AIR 施設等で OB、OG が活躍している。
- 現状当館ではコーディネーターが担当するレジデントアーティストの来日から滞在中のコーディネートまですべてを担当するが、各工程（渡航手配、税務、著作権、通訳、翻訳、アテンド、キュレーションやドラマトゥルグ）の専門性や精度を高める方法も検討したい。″
- 限られた予算の中で運営をしており、慢性的な人員不足と向き合っている中、人材育成という段階にも至っていないのが現状。ボランティアで運営するという開始当初からの流れの中で、次世代のスタッフの育成という問題に直面しており、この2年間ほどは事務局の役割を共有、分担するためにパートでスタッフを雇っている状況である。
- 人材育成は社員教育として行っていますが、レジデンスに特化した方法は確立されていません。
- AIR のディレクターおよび常駐のコーディネーター1 名（自身がアーティスト）を配置しており、双方ともにダブルワークの位置付けで職務を遂行している。現状は、繁忙期以外の時期に、コーディネーターは海外 AIR の現場に自主的に滞在し、アーティストとしての活動とコーディネーターとしての役割の双方の視点から AIR の現場で経験を積むことができている。ただし、国内外のコーディネーターとの情報、経験の共有をしながらマネジメント力を高めるための機会が不足しているため、海外の先進事例をリサーチする研修や、研究会などで研修成果の発表を行うなどの機会の創出を文化政策のひとつとして実施していただくことに期待を寄せる。
- 受け入れの経験があるスタッフと新人との組み合わせで、実績を踏ませる。
- 海外からのアーティストの受け入れ以前に、国内のアーティストの受け入れの経験の積み重ね。
- 日本の多くのレジデンス団体は自立できていません。皆何らかの資金援助を受けながら、来年の補助金は続くのだろうかと心配しながら運営しているケースが大半である気がします。レジデンスの中身よりも、本体そのものをどう存続、自立させていくか、そのアイデア、問題解決能力を持った人材が不可欠です。
- 人員不足は切実です。マネジメントは行いますが、コーディネートや研修がなかなかできません。施設も不足しています。

# 調査からみえてくること、今後の調査研究に向けて

研究員による座談会

今年度の調査、特にアンケートで示された結果をもとに、研究メンバー間での座談会を行った。相対的な分析には至らないが、インタビューと数字上から推察した、AIR で求められる人材像、育成のあり方、また、AIR そのものが社会化するためのあり方、次年度に向けた調査案について議論と考察を行なった。

## 【AIR に求められる人材像とは】

- レジデンスの活動の中で最も必要なのは、海外から滞在するアーティストの仲介役、コーディネーターというのは理にかなっている。

- 事業規模からも求められる人材が推察される。事業費が 250 万円以下の小規模が全体の 1/3 を占めているということから設備的にも限られていることが推測され、テクニカルの専門性についてはニーズが少ないのではないか。

- 事業規模が大きく、最後の成果発表のクオリティが高く求められる場合には、プロデューサー、キュレーターの専門性や、テクニカルスタッフの必要性もあるだろう。

- 陶芸、舞台芸術の施設を運営しているところでは、窯の管理、指導、照明や設営技術など求められるスキルがはっきりしており、専門性が重要視されるだろう。一方、美術は表現の幅があるため、ここでいうところの専門人材とは、コーディネーター、キュレーター、プロデューサーを指しており、前述のエンジニア系の人材の必要性については言及されていない。

- 芸術祭であれば、過去の事例に沿ったフォーマットがあるため、そこに適した人材をある程度設定できると思うが、AIR では行政運営もあれば、マイクロレジデンスもあり、アーティストに寄り添うものなのか、あるいは事業への協力者としてアーティストに関わってもらうのか、かなり幅広く存在する。その中で共通のものを見出して人材育成のあり方を言及すること、また、アーティストの育成のための設備や場はあっても、マネジメントする側を共通で育成することができる場はかなり難しい。

- 語学力、作品や作家を理解するというコミュニケーションはもちろん必要だが、それ以外の部分は施設によって目的が大きく異なるので、例えば地域の中で AIR が外部連携の拠点になるというような強いビジョンがあれば、それに従って人材のあり方を設定していけると思う。

## 【AIR の役割、目的、成果目標によるニーズの違い】

- 求められる人材は、AIR 事業にどのような成果を求めているかによって違いがあるだろう。そもそも AIR は多様であるため、ひとつの定義をつくることが難しい点もある。
  不足する専門性が「コーディネーター」という回答の理由は、質の高い成果よりはプロセスを重視し、そのプロセスの中でコミュニケーションを誘発するような人材がいることで成立すると考える運営団体が多いということだろう。

- 求められる人材とは何かを考える場合、例えば地域活性のための「AIR の役割は何なのか」ということを改めて考える必要がある。（京都 Re:search の場合）AIR は手法である。地域の人たちにわかりやすい手法として AIR を取り入れ、各地域にマネージャーを配置しイベントとして展示を行うという場をつくっていく。マネージャーたちは、地域との密なネットワークを作りながら AIR を通した（地域活性の）拠点形成のあり方を考え、活動することが求められ、アーティストに対しては教育的な役割を果たすことにもなる。

## 【AIR の再定義—オルタナティブという視点】

- 滞在制作をともなうアートプロジェクトと何が異なるのか。AIR とは何かという定義が必要。だからこそ事業の必要性、人材の必要性があり、どのような未来を描けるのかを示せると良い。

- 地域活性化として寺院、古民家のような地域資源となる場を活用することの方に重きが置かれる場合、AIR の本質からは遠ざかることも懸念される。資源を活用することだけを標準にすれば、AIR は個性的なアーティスト・ホテルの全国ネットワークとして広がってしまう恐れがある。

- 文化政策的なことに踏み込めば、恒常的にすでにあるさまざまな既存の制度に対しての関係性を軸とし、AIR の位置付けを設定できると良いだろう。例えば美術館や地元の大学などのあり方を、より多様で意義ある形にしていくためのスパイスのような役割として AIR が重要であると言えると良い。全国的にあまねく行われることが必要であるとして、標準化することができるのではないか。

- AIR と人材育成という2つの観点だけでは、AIR の持続可能性を探る調査としては足りないのではないだろうか。フォーカスする場があり、そことの関係性が成立するとよい。例えばフォーマットが決まっている美術館や芸術祭の中のオルタナティブとしての役割というように。もっと大きな視点で共通の課題を見出し、説明する必要があるのではないか。

- オルタナティブというキーワードは大事なのではないだろうか。AIR を考える上で、美術館、芸術祭、大学教育などの制度、社会の位置付けに対してのオルタナティブやカウンターパートであるという見方をすると、それらが対立する概念ではなく、社会に対して美術館や大学だけでは成し得ない役割を AIR が補完しているというように。

- 役割としては、確かにいろいろなものと結びつける潤滑油的なこともできるかもしれないが、AIR がその役割をすべて担うということもできないだろう。逆の見方をすれば、AIR 自体が目的にはなり得ない。芸術教育や、美術館という既存の制度に対して、オルタナティブなあり方を提示する、柔軟性を与える存在として必要であるということ。そういうものがなければ、制度自体が画一化し、閉塞していってしまう。だからこそ、そのような存在が必要であり、それらを担うことのできる人材が必要であるということの方が理解しやすいのではないか。そうしたオルタナティブとしての AIR の中に地域をコーディネートできる仕組みがあり、アーティストを受け入れる機能があるということでの社会的意義がある。そこを多様化させ、多様であることを保つための人材育成の必要があるのではないか。

- 過去に行われた、AIR 調査（2012 年度：ニッセイ基礎研究所）の中では、AIR はアートの生態系を支える存在であるということが提示されていた。

- AIR 自体が自立した存在であることの意義がなくはないと思うが、むしろ積極的に美術館や芸術祭、学校と結びつきながら循環をしていかないと生き残れないのではないだろうか。個々は小さい存在であるが、その AIR があることで、繋がりを生んでいく。そもそも AIR が「移動するアーティストを受け入れる仕組み」であるという、風通しの良い場所であること。制度化されたものに対して別のあり方を提示する役割を AIR が担えるのではないか。

## 【人材育成のあり方】

- 前述のような考え方でいえば、多様さを保つオルタナティブな AIR の場を経験した人材が、その後の美術館や芸術祭の場にキャリアシフトしているケースもある。それが AIR を通した人材育成であり、その土台があるからきちんと文化を育てることができる、根の部分が AIR なのだというようには言えないだろうか。

- 例えば、とある AIR 団体から「事業運営のために常に多くの助成申請をしなければならないのだが、それを継続していくことで、運営基盤を支えるスキルを手にした人材として育った」という話をうかがったことがある。その後、別の組織に移る人もいれば、よりオルタナティブなものを自分自身で新たに構築していく人もおり、結果として多様な活動が生まれているのだと。AIR を支えるための人材としてのみに特化せず、AIR を通して文化を支える多様な担い手を作っているのだというように捉え直したほうがよい。

- AIR「の」人材を育成するのではなく、AIR「で」人材を育成すると言えるのではないだろうか。

- 例えば、現在、美術館でエデュケーション部門を設けるなど、社会に開かれた場としての多様性を求められているが、AIR を通して育った人材がやがてはそうした役割を担うことができる。

- 美術館の中で人材を育てればより良い美術館をつくることができるかもしれないが、AIR の中で人材を育てれば、より新たな面白い活動が生まれるというように。

- 例えば美術館のスタッフが地域の AIR で研修を受けるなどの人材交流があるとよいかもしれない。AIR そのものがそのような広がりをつくる機能を持つ場所として、地域の中に位置付けられるとよいのではないだろうか。

## 【今後の調査案、その他】

- アンケート回答者が現場担当者なのか、管理職であるかによって、現場に不足している人材、求めるスキルに対し、求めるものが違うと推察される。それらのギャップについても今後の調査によって見えてくるとよいのではないか。

- AIR で武者修行をし、自分自身にある既存の価値をゆさぶられた後に、別の活動や組織に転向したという人がいれば、そのキャリアについての考えをインタビューすることは有効であろうか。今年度、研究会を実施した滋賀陶芸の森では、広報などを担当する事務系の職員が、地域で NPO を立ち上げ、まちなかで陶芸作家を紹介する場を開いた方がいる。

- AIR で育った人材が、それ以外の領域でキャリアップしながら AIR が持つオルタナティブな考え方を広めていく、確立された制度への考え方を拡張していくという役割を担う、あるいはネットワークを構築している方への調査を行うことは有効ではないか。

- AIR 出身の人たちはインディペンデント的な活動と国際的な活動のどちらかに関わり続けており、多様な経験を持つ、多様な人材が見えてくると思われる。AIR 以外の活動にも高いモチベーションを持って関わっている人も多い。さらに AIR を経験したアーティストのキャリアとどのように関係しているのかも追うことができるとよい。

- 地域の中で新たな取り組みを構想していく際に、既存のプログラムや仕組みを取り入れるのではなく、AIR を経験した人材がマネージャーやコーディネーターとなり、地域を基盤に新しいプロジェクトを生み出していることを示すことができればよいのではないか。

- アンケートから出た数字でみると、AIR 黎明期から 20 年を経た雇用規模が見えてきた。現在の課題を抽出するだけではなく、過去に遡って 1990-2000 年代ぐらいに AIR に携わってきた人たちが、現在、どのような人材になっており、かつての AIR での経験をどのように現在の活動に生かしているのかという調査が必要ではないか。

- 現在 AIR に携わっている人たちに対しても、20 年後のモデルケース、あるいは目標になり得るような人材像に向けて引き続き AIR を支援しなければならないのではないか。

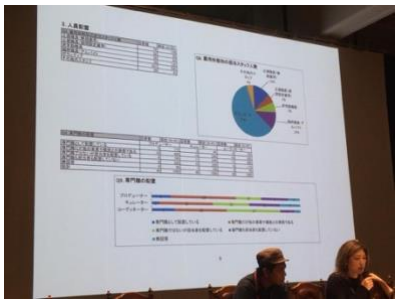
- AIR に対する資金的な支援や手厚い予算があまりない状況でも、マイクロで多様な活動が増えている。人材育成に向けた取り組みへのエネルギーが低くなっている中で、現場としては疲弊が始まっているのではないだろうか。プロジェクトのみならず、「人」にも向けた支援体制も必要になっているということを、本研究で言うことができればよい。

- 来年度の調査では、20 年前に AIR に携わっていた人たちのキャリアの動向と、現在 AIR に携わっている人たちが描くキャリアの姿との間に、ギャップがあるかを示すなどの調査ができるとよいだろう。

# あとがき

日沼　禎子

## レザルティスミーティング京都 2019 への参加および中間報告について



2019 年 2 月 6 日―9 日の 3 日間にわたり、世界最大規模の国際アーティスト・イン・レジデンス・ネットワーク「レザルティスミーティング京都 2019」が実施され各国からの AIR 運営者、アーティスト等が集い、フェイス・トゥ・フェイスの議論、交流が行われた。今大会のテーマは「新しい創造との出会い」。新たな芸術の創造の根源を支える持続可能な運営について、社会課題、環境問題などに取り組むためのプラットホームとしての役割、また AIR 運営における新たな経済的取り組みに係る研究発表や、AIR の現状や課題について活発な情報・意見交換の場となった。

筆者が登壇したセッションでは、本研究について発表の場を設けていただき、(2)のアンケート調査結果を中心に報告し、日本の AIR の現場課題について共有することができた。会場からは AIR の成果・評価を図るための資料として英語翻訳、web 上での公開に対する要望が挙げられたことから、最終成果報告への検討材料としたい。

また、AIR の持続可能な運営については、世界共通の課題であり、助成団体、運営団体、研究者がともに AIR の社会装置としての顕在化に向けた対話を続けていく必要がある。世界のクリエイティブを受け止めるプラットホームとして、日本がどのように取り組んでいくべきか議論を深め、実践していくことが重要である。

## オルタナティブとしての AIR の可能性。なぜ、AIR が必要なのかへの問い～次世代に繋ぐ

本研究の最後に、各データやインタビューによるエピソードを紐解きながらフリーディスカッション(座談会)を行ったことは、大変有意義であったと考えている。その際に「オルタナティブ」というキーワードが挙げられた。この言葉は、筆者が 12 年間にわたって関わった「国際芸術センター青森」の初代館長であり、アーティストとして世界中の AIR を経験してきた浜田剛爾氏が言い続けてきた「常に AIR はオルタナティブな存在である」という言葉を想起させた。

筆者は、日本における AIR の黎明期ともいえる 1990 年代に AIR の現場でのキャリアをスタートした。初めての AIR は、兵庫県津名町(現:淡路市)で行われていた多色摺り水彩木版画研修プログラムの事務局として。続き、1999 年から「国際芸術センター青森(ACAC)」(2001 年開館。当初の予定名称は「芸術創作工房(仮称)」)準備室のキュレーターとして、施設建設からプログラム設計、運営までを担当した。設立準備当時は、ARCUS や秋吉台芸術村などの先例があり、多くの自治体がアーティストの新たな創造活動と地域活性、国際性と地域性の双方を醸成するための新たな文化活動、施設のあり方を模索していた時代であった。ハコモノ行政への批判と、地方行政の税収減などによる新規美術品購入予算を含む運営費の大幅な削減にともない、「美術館冬の時代」ともいわれ、ハードよりもソフトを重視する文化拠点のあり方への課題が、AIR 事業推進の背景のひとつであった。

他方、創作活動を行うアーティストをとりまく環境も、AIR を通して見ることができた。ACAC では推薦制と公募制の2つの AIR プログラムを実施していたが、公募制では海外からは当初から年間 300 件近い数の多くの応募者があるにも関わらず、国内アーティストは数十件にとどまっており、日本人アーティストが自身の拠点を離れ中長期的な創作活動に取り組むことが困難であったのかが顕在化した。

2000 年代から現在は AIR の多様化が進み、AIR に対する公民からの助成制度などの支援の機会も増え、AIR を活動のフィールドとする国内アーティストの数が増加したことからも、少しずつ社会装置としての顕在化がみられるようになった(この推移に関しては調査が必要であろう)。また、国内でも数多くの芸術祭やアートプロジェクトが開催され、地域資源を活用した文化の発信、地域経済への貢献や、社会課題解決への大きな期待が寄せられるようになった。アーティストの活動の場と、文化事業への多様な観客・参加層の関わり、アートによる社会貢献という点では、こうした場は大いに発展すべきであろう。しかし、その一方でアーティストにとって、自らの表現や時間が消耗されるスピードは相当なものであると推察している。本来、ものづくりとは、ゆっくりと思考し、トライ&エラーの中で醸成されてゆくもの。そうした場と時間が与えられること、その根源的な活力を生み出す場が AIR であることは間違いない。そして、そこには、アーティストのパートナーであるとともに、地域社会とのつなぎ手となるコーディネーターをはじめとする担い手が不可欠である。アーティストの創造的活動をゆっくりと醸成し、その萌芽を支えるための一定の時間が必要であるように、コーディネーター、アーツマネージャーにとっても、その地域や活動目的に寄り添い、そこにしかない「オルタナティブ」なあり方を生み出すためにも、等しく時間が必要なのである。AIR とは本来的に「人と育てる場」であるという最も基本的な考えに立ち、次世代を担う多くの担い手を育てる環境づくりに向けた実践と研究を、今後も進めて行きたい。

## 【参考資料】


『平成 24 年度 文化庁委託事業 諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業』(2013 年／発行: 株式会社ニッセイ基礎研究所) ＊

『MICRORESIDENCE! 2013/2014:Artisit in Residence (AIR)を考える アーティストの創作活動の場(館)―その社会装置としての仕組み、ネットワークの可能性』(2014 年／発行:マイクロレジデンス・ネットワーク・フォーラム実行委員会/遊工房アートスペース) ＊

『MICRORESIDENCE! 2014:若手作家への機会と場としてのアーティスト・イン・レジデンス (AIR)とは―Y-AIR の可能性、欧州文化首都 2015 Pilsen との試み』(2015 年／発行:マイクロレジデンス・ネットワーク・フォーラム実行委員会) ＊

『MICRORESIDENCE! 2014:若手作家への機会と場としてのアーティスト・イン・レジデンス (AIR)とは―Y-AIR の可能性、London との試み』(2015 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『London/Tokyo Y-AIR Exchange Program 2015 スタジオ制作と海外創作体験の可能性』(2016 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『MICRORESIDENCE! 2015:Y-AIR 事例集 Vol.1 若手作家の機会としてのアーティスト・イン・レジデンス』(2016 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『MICRORESIDENCE! 2016:Y-AIR 事例集 Vol.2 若手作家の機会としてのアーティスト・イン・レジデンス』(2017 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『London/Tokyo Y-AIR Exchange Programme』(2017 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『MICRORESIDENCE! 2017:チェコと日本のアーティスト・イン・レジデンス活動を通した交流』(2018 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『MICRORESIDENCE! 2017:アーティスト・イン・レジデンス(AIR)と美術大学の協働 Y-AIR フィンランドと日本の試み』(2018 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『London/Tokyo Y-AIR Exchange Program 2018 活動報告』(2019 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『MICRORESIDENCE! 2018:Y-AIR・フィンランドと日本の試み・Part2』(2019 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『MICRORESIDENCE! 2018:バスクの若手アーティストの日本滞在制作の活動記録―AIR と美術大学の協働』(2019 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『MICRORESIDENCE! 2018:Y-AIR Case Study 'Art Camp'を通して考える AIR と美大の協働』(2019 年／発行:遊工房アートスペース) ＊

『平成30年度 アーティスト・イン・レジデンス研究会＋トークショー報告書』(2019年／発行:公益財団法人滋賀県陶芸の森)


**(＊)各組織の WEB サイトより pdf データのダウンロード、閲覧可能**

## 【共同研究・ 執筆者】

本研究においては、下記を共同研究者および執筆者とし、また、各研究会開催においては AIR ネットワークジャパンからの協力を得ながら、国内外の有識者、AIR 研究者、担当者等との議論を共有し、取材、編集、検証を行なった。


**日沼禎子｜女子美術大学教授、陸前高田 AIR プログラムディレクター、AIR ネットワークジャパン実行委員会 事務局**
1999 年から国際芸術センター青森設立準備室、2011 年まで同学芸員を務め、AIR を中心としたアーティスト支援、プロジェクト、展覧会等の企画、運営を行う。2013 年より陸前高田 AIR プログラムを立ち上げ、プログラムディレクターを務める。さいたまトリエンナーレ 2016 ではプロジェクトディレクター、2017 年より緑と花と彫刻の博物館(宇部市 ときわミュージアム)アートディレクターを務める。

**大澤寅雄｜ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員**
NPO 法人アート NPO リンク理事、NPO 法人 ST スポット横浜監事、九州大学ソーシャルアートラボ・アドバイザー。慶應義塾大学卒業後、劇場コンサルタントとして公共ホール・劇場の管理運営計画や開館準備業務に携わる。2003 年文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。帰国後、NPO 法人 ST スポット横浜の理事および事務局長、東京大学文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員を経て現職。共著＝『これからのアートマネジメント"ソーシャル・シェア"への道』『文化からの復興 市民と震災といわきアリオスと』。

**菅野幸子｜AIR Lab アーツ・プランナー/リサーチャー、AIRネットワークジャパン実行委員**
ブリティッシュ・カウンシル東京、国際交流基金を経て現職。専門領域は、アーティスト・イン・レジデンス、国際文化交流、文化政策。主な著作に現代アートとグローバリゼーション――アーティスト・イン・レジデンスをめぐって」(『文化政策のフロンティア I――グローバル化する文化政策』[勁草書房、2009]所収)など。文化政策学会会員。

**作田知樹｜文化政策研究、Arts and Lawファウンダー**
東京芸術大学美術学部卒業、東京大学大学院修了。行政書士。メディア・デザイン研究所所属。京都精華大学非常勤講師。専門は文化政策とアートマネジメントの実務および法務。単著に『クリエイターのためのアートマネジメント』(八坂書房、2009年)、共著に『美術の日本近現代史−制度・言説・造型』(東京美術、2014年)など。ミュージアムや国際展の事務局で学芸スタッフとして勤務した後、2016年から2年間国際交流基金ロサンゼルス日本センターで副所長を務める。また非営利活動として2004年「Arts and Law」を立ちあげ、プロボノの弁護士による無料相談を提供するほか、芸術・文化関係者向けの法、契約、人権、倫理、会計に関する正確な情報共有と議論の場を作っている。

**辻 真木子｜遊工房アートスペース コーディネーター**
1991 年生まれ。女子美術大学博士前期課程アートプロデュース研究領域修了。女子美術大学・大学院在学時に同 AIR でインターンを実施、卒業と同時にスタッフとして従事。2014 年西ボヘミア大学(チェコ・プルゼニ市)で開催されている ArtCamp に受講生として参加。2015 年には遊工房より ArtCamp 運営局へインターンとして派遣された。



**【協力】**(順不同)
レザルティスミーティング京都 2019(京都市、京都芸術センター、レザルティス財団、文化庁)
京都芸術センター
遊工房アートスペース
京都:Re-Search 実行委員会
東山アーティスツ・プレイスメント・サービス
PARADISE AIR
NPO 法人 黄金町エリアマネジメントセンター
公益財団法人 滋賀県陶芸の森
宇部市(UBE ビエンナーレ事務局)
AIR ネットワークジャパン

［文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業］
新たな文化芸術の創造を支える活動支援および人材育成のためのプラットフォーム形成研究
H 30（2018）年度　研究報告

編　集：女子美術大学（芸術学部アート・デザイン表現学科　アートプロデュース表現領域研究室）
発　行：文化庁
発行日：2019 年 3 月 31 日